
コードギアス 満ち潮の夜【第壱夜】 ココデハナイドコカへ

月城十夜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

コードギアス 満ち潮の夜 【第壱夜】 ココデハナイドコカヘ

【Nコード】

N2687M

【作者名】

月城十夜

【あらすじ】

16歳の誕生日を迎えたばかりの夜更け過ぎ、ルルーシュは謎の黒衣の女に出逢った。名前をC.C.。それ以外のことは一切知らない。そして、半年後。たびたび彼女と逢瀬を重ねていたルルーシュは。完全オリジナルで描くパラレル・ストーリー。

SCENE・000 : PROLOGUE

夜に明滅する三つの灯火。

太陽の昇っている最中なら、尊大に人を操ることに慣れている信号機も、さすがに無人の王国では勝手が違うらしい。^シ

まず、あやつるべき喧騒が無い。

誰もが皆、曖昧に生きることが許されたこの世界では、午前零時を過ぎたあたりでも出歩く人の姿はさして珍しくも無くなってしまうが、それから更に二時間ばかりが経過した丑三つ時にもなると、さすがに皆おとなしく寝静まってしまう様子で。煌煌と灯かりに照らされた三叉路を通る者の影は、随分としばらくどこにも存在していなかった。

辺りにはひたすらに濃い闇だけが落ちている。

風も途絶えて久しい。

もし、そこに、シグナルの明滅さえ存在しなければ、まさしく世界は一葉の写真の中に切り取られた光景のように、無意味に、無感動に、静止した現実のだまし絵にだつてなり得たかもしれない。

けれども、まるで生真面目にシグナルは明滅を繰り返していた。それひとつだけの動きが、世界に現実味を帯びさせていた。

そこは、何もかもが静止した夜の王国。

誰もが安息をむさぼるのに忙しくて、ゆえに無人の夜の王国。

だが、住人は、わずかばかりだが存在していた。

時間の使い道を持て余している愚かな人間どもも、とりあえずはその一員である。

しかしながら、静寂^{しじま}を破らず、無は無のままに。

何者にも気付かれずに夜の隙間に忍び込める生き物こそが、やはりこの闇にはふさわしいだろう。

たとえば、そう　夜陰に乗じて闊歩する姿を時折見かける黒猫たちのように。

いつだって黒猫たちは、唯一月への拝謁を認められていることの自信から、悠然と夜の街を闊歩して見せるのだ。

しかしなるほど、歩む姿ひとつにすら常に問われる美学。^{エスステイクス}

その優雅さを学びたいと、いつもルルーシュは思うのだった。

できるものならば、そのまま夜の生き物たちと同化してしまいたい。

黒猫が、その優雅な足取りを見せつけながら、目前をゆったり横切っていくのを見守って、やがてルルーシュはその背後からこっそり忍び足で追跡を開始した。

律儀な影がそれに追従する。

ふわり、ふわりと、空中を歩むように歩を重ねる。

アスファルトの上に細く長く伸びる影は、漆黒に限りなく近い闇の色。

その闇の色に半ば同化している黒猫が、ややあって、チラリとこちらを振り返った。

「修行が足りないね」

一瞥して、真顔でポツリと皮肉を利かせた。

それきり黒猫はあっさり興味を失って、ルルーシュを置き去りにしてどこかに去ってしまった。

優美な弧を描いて左右にゆれる尻尾の先が闇の中に消えてしまうまで、ルルーシュは呆然とその後ろ姿を見送った。

どうやらまた彼らの隠れ家に、案内され損なってしまったらしい。わざと不貞腐れた態度で、ザリリと影を踏みしめながら不満を吐きこぼす。

「…修行が足りないのだとさ」

また一度、シグナルが赤から青に変わった。

「遅くなったな」

直前まで気配を感じなかった場所から、女の声がひっそり囁く。
まるで夜が、長の静寂に退屈をして、悪戯に囁いたような声だった。

そんなふう突然背後から、声を掛けられるのにもルルーシュは慣れてしまっていた。

いや、すくなくとも、自分ではとくに慣れているつもりでいた。
ルルーシュは、何も言わずに即座にピタリと歩みを止めると、高鳴る心音を意志の力で抑え付けながら、ふてぶてしい態度でその場にゆっくり振り向いた。

「 10分遅刻だ」

ところが、どうしたわけか、見渡す範囲に人影はまったく見当たらず。

しかし、その点に関しては、すっかり慣れていることだったから、気にせず闇のひとところに向かって辛辣な視線を投げかける。

すると、たちまち女は、当てつけがましい雰囲気で、ハアと大きく嘆息した。

「仕方がないだろう？ 抜け出すのに少々手間取ったんだ、すこしくらい大人の事情を察しろ」

「勝手を言うな。おまえはいつもそうやって、前回も、前々回も、前々々回も、いつも同じような口実で、いたいけな少年を、こんな夜中に平気で待たせているじゃないか？」

憤然と息巻きながら不満をぶつけると、女はクスリと苦笑まじりに一歩ルルーシュに歩み寄る。

そうと知れたのは、苦笑と共に女の姿が闇の中からヌツと現われ出たせいであった。

位置的には、ほとんどルルーシュの真正面からであった。

しかしなるほど、これでは少々の灯かりでは、女の姿を照らすことは適わないわけである。

ようやく光の下に現われ出たにも関わらず、女は闇の多大なる未練を、一身に纏っているようにしか見えなかった。

明るい若草色の頭髪を、いつものように頭頂部で纏め上げ、その上から漆黒のレースを被せている。

幾重にも重なるレースは女の口元まで覆い隠していて、ヌラリと艶やかに光っている真紅の唇のすぐ下から爪先まで華奢な身体のラインにぴったり張り付くような黒いドレスを身に纏っている。

指先までしっかりと包み隠しているレースの手袋も黒。

踵が十三センチもあるピンヒールの黒ブーツがここまで似合ってしまう人物を、ルルーシュはこの女以外に知らない。

完全に足元に落ちている影と同化してしまっているドレスの裾は、マーメイドスタイルと呼ばれる末広がりのデザインで。中央には裾から太腿の付け根まで大胆にスリットが一本入っていて、中から幾重にも重なり合っている漆黒のレースが、女の脚線美を危ういところで包み隠す形で、贅沢にも地面の上まであふれ出している。

つまり女はルルーシュよりも十センチばかり長身だったから、あきれるほどに濃密な面積で漆黒を身に纏う結果になっているのだった。

そして何よりも、それらの黒は、女の美しさを惹きたてるのに成功していた。

いいや、いつそ黒という色の概念こそが、この女を飾るために世に生まれ出た副産物のようにも思えた。

女があんまり黒に馴染んで見せるものだから、一度戯れに「ひょ

つとしておまえは、夜の使者なのか？」と訊ねてみたことがあった。しかし、女は驚いた様子もなく、「いいや、単なる悪い魔女だが？」と真顔で返してきた。

とつさに「笑えない冗談だな」とでも笑い飛ばしてやれば良かったのだろうが、本当に「悪い魔女」にしか思えない言動を数え切れないほど思い知っているだけに、逆に返答に困ってしまったルルーシュは惘然と顔を顰めるしかなかった。

女の名をC・C・という。

本名は知らない。

なぜならルルーシュは、それ以上のことを、まだ何も知らされていないからだ。

ルルーシュが十六の誕生日を迎えたその日の晩に、突然彼女に出会ってから、かれこれ半年ほどになるだろうか。

もちろん半年のうちに、彼女には無断でこっそり調べたことは無数にあったが、いまだに彼女の容姿を形容する以上に明言することは出来そうにないのである。

だが女は C・C・は、随分とルルーシュの事情に通じていると思えた。

熱心に請われたせいではあったが、結局、彼女に話して聞かせたのはルルーシュ本人なのである。

大して興味深いとは思えない身の上話に、C・C・はあきれられるほどの関心を示して熱心に聞き入っていた。

記憶力には自信のあるルルーシュでさえ、C・C・の記憶力には驚嘆させられる場面もままあったから、ひよつとすると、ルルーシュ自身、話したことを忘れてしまったことさえ、C・C・は余さず記憶している可能性も考えられた。

いや、きつと、ほぼ確実に、C・C・はルルーシュの話の大半を覚えているのであろう。

自惚れではなしに、そう思えるだけの確信と実績がルルーシュには存在していた。

本人以上に、その人に詳しい人物 ……

よくよく考えてみれば、奇妙な符合ではあるのだが。

そんなC・Cに初めて出会ったのも、今宵と良く似た夜更け過ぎのことであった。

SCENE・001 : 分岐点

二月と言うのは曖昧な季節である。

暦の上では立春を迎えた頃からもう既に春の扱いだが、ひよつとすると、一年のうちでも一番冷え込むのがこの時期の特徴ではないだろうか。

寝つきが悪いうえに、眠りが浅くて、小さな物音だけでもすぐに目が覚めてしまうタイプのルルーシュは、明け方にグツと冷え込んだ冬の名残の大气に、頬をじんわり冷やされる感覚だけでも目が覚めてしまつて。

ベッドの中でひとり懔然と顔を顰めながら、本日第一回目の溜息をハアと力なく吐き出した。

ついでに布団の中で身体をウンツと伸ばすと、気だるい動きで目覚まし時計を掴み取る。

眠い目をしばたたかせながらデジタル時計の文字盤を眺めると、そこにはAM 05:08の文字が表示されていた。

ベッドに入った時点で午前零時を過ぎていたわけだから、眠りに落ちるまでに軽く一時間は要してしまう自分の体質を考えると、いくらなんでも眠りが浅すぎだ。

「……まったく、柄にもないな」

どうやら自覚の無いところで、すこしは緊張しているらしい。

たかが高校入試の受験日当日を迎えたくらいで。

ルルーシュは苦笑を洩らすと、そのままベッドから抜け出して、シャワーを浴びるためにバスルームに向かった。

私立アッシュフォード学園。

都心の一等地に広大な不動産を有しているアッシュフォード家が、二百年にも及ぶ歴史を誇って経営している学園の総称である。

別名、アッシュフォード・ストリートとも呼ばれる敷地内には、東から順に幼稚舎から大学院までが効率的に並べられていて、学生を相手にした商店街がその通りを取り囲む形でひとつの町が形成されている。

私鉄の沿線や、バスの停留所なども完備されていたから、日中には随分と総人口が膨れ上がる大規模な町でもあった。

ルルーシュも、その学園に幼稚舎から通い始めて、今年の春で十二年だ。

家柄の古さだけなら負けないものの、今ではありきたりな中産階級まで落ちぶれてしまったランペルジ家とは違って、学園の経営以外にも辣腕をふるって貿易や不動産で財を成しているアッシュフォード家は、今でも世界に名だたる名門財閥で。毎年右肩上がりの成長を続ける形で、莫大な富と権力を築き上げていた。

言ってみれば、学園の経営は税金対策以外の何物でもなかったが、アッシュフォード学園を卒業している実績だけで、将来的にアッシュフォードが出資している有名企業への就職が約束されている安心感からか、多大なる学資を投資してでも、率先して我が子を通わせたいがる親御さんたちは多かった。

その点、将来は実家の家業を継ぐことになるわけだから、ルルーシュには直接関係ないはずだったが、

「今のうちから、利用できる手駒をできるだけ多く見つけておけ」という、何とも実利主義的なありがたい父親の教育方針により、ルルーシュも大学を卒業するまではアッシュフォードに在籍する学生の一人生として安楽な生活を満喫するつもりでいたのである。

ところが、ある日の休日、ふと何気なく、最愛の妹ナナリーが発したひと言が、彼の命運を一変させてしまった。

「お兄さま？ お兄さまは、このままアッシュフォードの高等部へ進学されるのですか？」

焼きたてのクロワッサンにプレーンオムレツ。季節の緑黄色野菜は温野菜にして、マヨネーズ和えのアボカドディップを添えて。厚切りのベーコンとカボチャのスープ。デザートには、ベイクドチーズの上にサワークリームを重ねたアップル・パイ。

八月に入ってから、週末には決まって雨の降る一日が続いていたので、久方ぶりの晴天を満喫するために「たまには気分を変えて」とガーデンテラスに朝食を用意して、家族三人でゆっくり食事を愉しんだ後のひと言だった。

ルルーシュが腕によりをかけて作った料理の品々を、心ゆくまでたっぷり堪能して。

見るからに幸福そうな薔薇色に上気させている頬を、朝の陽射しの中でキラキラ健康そうに輝かせながら微笑むナナリーの笑顔を愉しみながら、ルルーシュは包み込むような優しさで目を細めて微笑む。

「そうだね、一応そのつもり。せつかく、この春に同じ校舎に通い始めたばかりなのにね、残念な気もするけれど」

毎朝通学の際に利用しているバスの停留所は、学校別に分けられているので、連続した敷地内に建てられているとは言え、校舎が変わってしまつと通学に要する時間も数十分から三十分単位で変わっ

てしまうのだ。

ルルーシュの気持ち的には、別に遅刻しようがナナリーと過ごせる時間を優先するつもりだったが、中等部に進学すると同時に、迫力のある笑顔でにつこり微笑んだ母親から、

「シスコンも大概にしてちょうだいね？」

と事前に釘を刺されてしまったので、ルルーシュも渋々あきらめた。

「でもま、たまには一緒に出られると思うし。何なら、帰りがけに待ち合わせをしても構わないわけだからね」

空いていたナナリーの紅茶のカップをさりげなく引き寄せて、てきぱきとサーブしてから苦笑を浮かべると、この春から中等部に通い始めたばかりの二つ違いのナナリーは、淹れたてのオレンジ・ペコの香気を愉しみながら「そうですね」と花がこぼれるような愛らしい微笑を浮かべた。

「私も本当に残念ですけど、どのみち二年後には進路を別にするわけですから、同じことですよ」

「……って、ナ、ナナリー？　どういう意味だい、それ」

天使のような表情で、サラリと問題発言をかまされて。

そんな話は初耳だったルルーシュは、思わずテーブルを挟んだ向かい側から話に食いついた。

うつかり口を滑らしてしまったことに気づいたナナリーは、ハツとした様子で口元に片手を押し当てると、首筋まで真っ赤に染めながら、ルルーシュの位置からつむじが見えるほど深く俯いてしまった。

にわかに吹きゆく葉風に、ざわりと色めき立つローズ・ガーデン。今は二度目の花をつけているツルバラは、ピエール・ド・ロンサルだ。

芝生を濡らしているスプリングラーの温度に冷やされて、そよそよと吹きゆく緑の薫風を、さっきまであんなに心地好く感じていたはずなのに、一瞬でそんな余裕は消し飛んでしまっていた。

ナナリーが、この俺に隠し事をしている？

まさかにも信じがたい気分で、無意識のうちにもギュッと強く拳を握り締めて。

それでも精一杯に自制心を發揮して、優しい口調を心がけながら口を開きかけた刹那、何の前フリもなく突然背後から首筋に両腕が絡みついてきて、ルルーシュは「ぐえっ」とカエルが潰れたような声を發した。

「趣味が悪いわねエ。こんなに気持ちの良い日曜日に、朝から妹イジメて愉しんでいるの？」

「母さんっ！」

仕事の電話で、中座していたマリアンヌは、愉しそうに言っテルルーシュの髪をグシャグシャにかき回したが、どうやら途中から話を聞いていたらしい。クスクスと悪戯に笑って、さっさとテーブルを回ってナナリーの隣の席に腰を下ろすと、すっかり身の置き所を失くしているナナリーの背中をポンポンと叩いて慰めた。

もっとも、口に出したセリフは、あんまり『慰めている』とは言いがたいものだった。

「案外、早くバレちゃったみたいね？ まア、そろそろ話すつもりだったけど」

「駄目ですっ、お母さまっ！」

「いいじゃないの、今更よ。せいぜい驚きなさい、ルルーシュ？」

なんとナナリーは、高校進学ついでに、皇さんのお宅に花嫁修業に出かけるのであった

「はあああああっ！？」

「お母さまっ、ひどいっ！」

兄妹揃って大声を發すると、フンツと息を吐きながら胸を張ったマリアンヌが、両手を腰に大威張りでのたまった。

「あいかわらず肝心のところで、詰めの甘い息子だこと。まさか本

気で、気づいてなかったとはねエ」

今年、三十五回目の誕生日を迎えた女ざかりの母親は、二十代前半にしか見えない若々しい美貌を輝かせながら、屈託のない様子でケラケラ笑った。

まさに今の今まで、完全に仲間外れだったことを知らされたルルーシュは、ナナリーに負けずに真っ赤になりながら、「説明してくださいっ！」と悲壮な表情で叫んだ。

皇コンツェルン。

現在は、名門・枢木家と共同経営する形で、主に製造、ITの分野でアッシュフォードに比肩する財を成している有名財閥だ。

こちらも税金対策で、約五十年の歴史を誇る学園を経営しているのだが、私立アッシュフォード学園が都内に敷地を有しているミッシェン系の学園であるのに対して、私立皇学園は京都・比叡山の山中に根城を構えた仏教系の学園だ。

しかも、全寮制の。

だから、この場合、「皇さんのお宅に花嫁修業に出かける」とは、要するに、「高校進学と同時に、皇学園に編入する」ということを意味するわけである。

食後のデザートをつつきながら、ひととおり説明をし終えたマリアンヌは、紅茶のカップをグツと一気に干してしまうと、空いたカップを当然のようにルルーシュのほうに差し出した。

しばらく茫然と言葉を失くしていたルルーシュは、すっかりうわの空の様子で紅茶を淹れる片手間に、何とか表面上の冷静を取り戻した。

「……ああ、そう、そういう話。てっきり俺は、あの件は解消したものだとかり思っていたけれど」

言ってしまったから、皮肉が過ぎたと思ったが、案の定、また一段と肩身を狭くしたナナリーが俯いてしまった。

気まずげに落ちた沈黙の隙間を縫い、そよりと吹きゆく風に乗り、香ばしく燻したようなベルガモットの匂いが漂う。

どこか漢方薬の匂いにも似ているために、本来ならばアイスで愉しむのが一般的なアールグレイを濃い目に抽出し、ストレートのままホットで愉しむのがマリアンヌの好みで。

八つ当たりは承知で、恨めしげな上目遣いで睨め付けながらルルーシュがカップを差し出すと、マリアンヌは何食わぬ顔つきでそれを受け取って。フンフンと小鼻を蠢かしながら、さっそく一口コクリと嚥下すると、いささか状況にそぐわない気をする陽気な声音で「やっぱルルーシュが淹れてくれるお茶は一味違うわねエ」と呑気に感想を洩らして、ついでのようにナナリーの後頭部をサラリと撫で上げた。

「いいじゃないのよ、認めてあげなさいな。だいたい私は、『生まれる前から婚約者』なんて反対だったんだから。自力で振り向かせてこそが重畳^{ちやうじやう}。お母さんのには、今のナナリーを応援してあげたいな」

「母さん……」

枢木スザク。

それが、ナナリーの想い人の名前である。

父親同士が生まれる前からの付き合いで、たがいに良いライバルでもあったシャルル・ランペルージと枢木ゲンブは、「将来子どもが生まれたら、姻戚関係を結ぼう」と固く誓い合うほどに仲の良い親友同士でもあった。

その果てに、やがて生まれた子どもが、ルルーシュと枢木スザクである。

だが、いかんせん男同士では、約束を果たしようがない。

仕方なく、次の子どもに希望を繋げることにして、二年後、マリアンヌが待望の女兒を授かった。

そのとき生まれたのがナナリーである。

父親同士はたがいに喜び合って約束を果たしたが、当時から企業の業績不振に頭を悩ませていたシャルルは、その数年後、ルルーシュが九歳の誕生日を迎えた年に、心労の末あっけなく脳溢血で他界

してしまった。

享年五十五歳の突然の出来事であった。

会社のほうは、マリアンヌが三十歳の若さで経営を引き継ぐ形で、なんとか再起の目処が立ち始めていたのだが。

以前からマリアンヌの美しさに目を付けていた枢木ゲンブが、絶好のチャンスを見逃すはずもなかった。

シャルルの死後、早や一年で、親切ごかしの横柄な態度で業務提携を持ちかけるのと同時に、それとなく愛人契約を匂わせてきたものだから、激怒したマリアンヌが今後一切の付き合いを断るのと同じに、スザクとナナリーの婚約も解消してしまったのだ。

おかげで、泣きの涙に暮れてしまったのがナナリーである。

物心つく以前から、「将来ナナリーは、スザクのお嫁さんになるのよ」と教えられて育ってきたものだから、幼いながらにナナリーはごくごく純粹に「だったら、スザクさんに恥ずかしくないお嫁さんになるう」と思いを温めている最中だったのだ。

それが当たり前の状態で八つの歳まで育ってきたのに、あっさり大人の事情で無かったことにされてしまった。

いや、正直言えば、婚約の件に関しては、まだまだ実感の追いつかないことだったから、「そうなのかア」とほんのすこしガツカリした程度で、別段それ以上に何かを思い煩うわけでもなかった。

それ以上にシヨックだったのは、それ以来ぱったりスザクからの音信が途絶えてしまったことだった。

初等部に進級してからは、長期の休暇を利用してしか顔を合わす機会はなくなってしまったが、それでも休みになると必ず連絡を取り合って、ルルーシュも交えた子どもたち三人で、毎日のように日暮れまで時間を忘れて遊ぶのに夢中になっていたものだった。

子どもなりに真面目にお互いを信じて関係を培っているつもりだったから、少々大人に邪魔されたくらいであっさり破綻してしまうとは信じられずに。ルルーシュにも協力を求めて電話をかけ、何通も手紙を書いて出してみたけれど、ただの一度もスザクから返信の

届かぬままに二年の月日が経過してしまった。

そして、三年後。

一切封を切られていない手紙の束が、宛名だけスザクの直筆で送り返されてきたのである。

ルルーシュとナナリーは、茫然と言葉を失くしたまま状況だけを前にして。

やがて、吹っ切れたような笑みを浮かべたナナリーが、きっぱり「あきらめます」と宣言したことにより、正式にスザクとの関係は破綻した。

すくなくともルルーシュは、そのつもりで今日まで過ごしていたのである。

「……お兄さまも、応援してくださいますよね？」

マリアンヌの言葉で、思い直したのだろうか。

それまでずっと顔を伏せていたナナリーが、躊躇いがちに顔を上げると、正面からルルーシュの目を見て言った。

ルルーシュは、曖昧に微笑むだけで返事をしなかった。

「母さんは、本気で賛成しているんですか？」

コンコンコン。

その日の夜ルルーシュは、ナナリーが寝たのを確認したところで、再びマリアンヌを相手に話を蒸し返した。

以前は父親が一日の大半を過ごしていた書斎に足を運んで、藪から棒に訊ねてからドアをノックすると、ルルーシュの位置からは背中を向けて、デコラティブなマホガニーの執務机でパソコンを叩き

ながら経営分析をしていたマリアンヌはモニターから視線を外さずにクスリと鷹揚に微笑んだ。

「そういうお兄ちゃんは、やっぱり反対なんだ？」

「真面目に話してるんです。からかわないでください」

二人きりになると、ひときわ他人行儀な口調になつてしまうのは、父親が亡くなって以来いつしか生じた習慣である。

父親が存命中には完全に母親だったその人が、仕事人に転じたことも大きく影響しているが。

それでも普段に比べれば随分とぶっきらぼうな口調で言つて、ドアを閉め。カッカツと苛立たしげに靴音を鳴らしながらマリアンヌの傍まで歩みを進めると、しばらく無心でキーボードを操作していたマリアンヌは、ひと段落着いたところで、ようやく思い出したように、横目にチラリとルルーシュの表情を冷たく流し見た。

「本気で真面目に話がしたいと言うならね、どうしてナナリーの居る前でハッキリ言つてあげないのかしら？」あの男は、おまえが大切に想うほどの値打ちもない』ってね」

「……ッ」

真面目に内心をぶつけてきたナナリーに対して、ルルーシュが卑劣にも穏便に逃げの手を打ってしまったものだから、マリアンヌは腹立たしく思っているわけである。

しかし、そうは言つても、ルルーシュにとつても、スザクはたった一人の親友で、大切な思い出を共有している幼馴染みでもあった。だから、ナナリーのためと言うよりも、自分自身を納得させたい一心で、三年前から定期的な、こっそりスザクの動向に探りを入れ始めていたのだが。正直言つて、ここ最近では、スザクに関する噂を耳に入れるたびに失望の連続で。

中でも一番ひどかったのが、「今ならあの男とすれ違つちゃうだけで、女なら誰でも妊娠しちゃうんじゃない？」といった聞くに堪えないものだった。

親友の評判を真つ向から貶められて、言つた相手を本気で呪い殺

してやりたいとルルーシュは激怒したものだ。反面、調べを続けていくうちに、次第にかばい切れなくなってしまったのが実情であり。

実際スザクは、自分と同じ十五の子どもの分際でありながら、あまりにも奔放に青春を謳歌し尽くしているのである。

思い出した怒りに、握った拳をブルブル震わせ始めるルルーシュを見て、マリアンヌは溜息まじりにルルーシュの頬をツルリと手のひらで撫で上げた。

「まあね、アンタが怒りなくなる気持ちもわからなくはないけど？アレはアレで立派な教育方針なんだけどな」

「アレの、どこがっ!？」

「母さんに怒ってどうするの?」

十五の子どもの分際で。

ルルーシュには悪いが、マリアンヌに言わせれば、ルルーシュだって立派にその一員である。

シャルルの死後、女手ひとつで会社の経営を立て直すのに必死だったマリアンヌは「家のことは、俺に任せてくれれば良いから」と自ら言い出してくれた、ルルーシュの頼り甲斐にすっかり甘えてしまった。

そして、ようやく一息つける状態まで落ち着きを取り戻した頃には、彼女の可愛いひとり息子は、意識的に感情を出し入れする方法を自力で習得済みだった。

だから普段の彼ならば、こんなふうに感情を露わにすることは、絶対に有り得ないのだ。

ナナリーの前でさえ いや、むしろナナリーの前では絶対に、負の感情は見せないように努力を続けている。

その息子が、母親である自分の前でだけ、顔を真っ赤にするほど直情的に激怒している様子を眺めながら、『しよつのない子どもねエ』とマリアンヌは内心で苦笑を浮かべた。

「ところでコレ、アンタの目から見てどう思う?」

指先でモニターを軽く弾いて促がすと、ルルーシュの反応を待たずに席を立ち、きびすを返した。

そのまま書斎を後にしてキッチンに向かって、待つこと三十分。そろそろ片付いた頃かしら？ と湯気を立てたブラック・コーヒを片手に書斎に戻ると、彼女の可愛いひとり息子は、とても十五の少年とは思いがたい冷え切った眼差しでモニターを眺めていた。

無粋なノックなどあつさり省略して、カッカカッと靴音を高く鳴らしながらルルーシュの背後まで歩みを進めると、ルルーシュはモニターから視線を外しもしないで、事前にプリントアウトしておいた数枚のA4用紙を、無造作にマリアンヌに手渡した。

無言でそれを受け取って、二、三分眺めていたマリアンヌは、遠慮なくクククツと喉を鳴らして笑い始めた。

「失礼ですよ、母上」

興味なさ気に頬杖をつきながら指先でマウスを弄んでいたルルーシュは、淡々と熱の入らない声音で皮肉を言う。

マリアンヌはクククツと笑い続けながら、ルルーシュの傍らに寄り添うようにアームチェアの肘掛部分に腰を下ろした。

「いやア、我が不肖の息子ながら、相変わらず容赦がないなと思ってさ。アンタがこの会社の社長なら、このロクデナシの役職者の三人どもは、明日から霞を食って生きなきゃいけないわけなんだけど？ 残念ながら、とりあえず今の段階では、恨みに思われるのはアンタでなく、美人女社長である私のほうなんだけどね」

資料に目を通すついでの手慰みに息子の後ろ髪をグリグリかき回すと、さりげなく母親の悪戯から逃れたルルーシュは、椅子の背にゆったり背中を預けて微笑した。

「もちろん、そのあたりのフォローも考えてありますよ。美人女社長 フンツ が逆恨みでもされて、解雇した連中に刺されでもしたら、明日から俺とナナリーが路頭に迷ってしまいますからね」「可愛くない息子だこと。もっと素直に、『母さんの身が心配なんです』と泣いて縋って見せたらどうなのよ？」

「そういうセリフは、もうすこしくらいまっとうに母親らしい言動を示してから言ってもらいたいものですね。純真な子どもの気持ち

をいたぶって、愉しんでいるような母親に言われたくないです」

「本当に馬鹿な息子なこと。これ以上ないくらい、可愛がつているじゃないの。あんまり可愛すぎて、思わず本気でいたぶりたくなっちゃうわ」

とても母子おやこの会話とは思いがたい皮肉の応酬を繰り広げながら、片腕をルルーシュの首筋に巻きつけたマリアン又は、形の良い細い顎先をルルーシュの側頭部に押し付けた。

そして同時に、豊満な胸元の谷間を、息子の華奢な肩口に食い込ませ、すこしの遠慮もなく体重を預けられ。ルルーシュはわざとらしく声に出してハアと溜息を洩らしたが、抵抗の兆しもなく母親の好きに身を任せると、冷静な指先でキーボードをカタカタと操り始める。

「いいですか、こちらの表なんです。その三人と合わせて、最低でも十人ほど不用な人員に早期退職を募ります。その際、給料の三十ないし三十五パーセント程度のカットを条件に、適当な関連企業を斡旋してやれば当面の生活はしのげるでしょうし、そもそも人員の配置に問題があるんですよ。現場の負担と、従業員の能力と、仕事量の配分があまりにも非効率的過ぎだ。その点に関する、俺なりの改善提案をまとめたのが七ページ目の資料です。それを踏まえただ上で、相手方の企業で発生した余剰人員を交換トレードした場合に考えられる、稼働率の推移と対費用効果指数は別表三にまとめてある通りなんですがね、その場合――

「ふんふんふん？」

それから三十分間は、完全にルルーシュの独壇場だった。

いずれはルルーシュが、会社の経営を引き継ぐことになるわけだからと、数年前から意識的に口を挟む機会を与えているわけだが。

途中で不要な口を挟むことなく、熱心に話に耳を傾けていたマリアン又は、やがてルルーシュが「というわけなんです、ご質問は

？」と、いつもの結び文句を口にしたところで、真紅の唇をニヤリと愉快そうに吊り上げた。

「そうねエ、ちよつとばかり机上の空論っぽい部分が気になるんだけど、たしかに考えてみる価値はあるかなア。そろそろ一度、現場に顔を出してみる？」

「遠慮します。今の俺の姿じゃ、舐められるのが落ちですから」

姿さえ違っていたら、今でも充分負けたりしませんよ、と言っていても同然のそのセリフ。

その小癪さが可愛くてたまらないといった顔つきでマリアン又は息を殺して微笑むと、ルルーシュの首筋に巻きつけていた腕をスルリとほどいた。

そして、手にしていたマグカップを強引にルルーシュに押し付けると、さつそく資料を検分しながら呟いた。

「そう、残念ね。今のアンタの姿だからこそ、馬鹿のフリして大人の本音を覗いてみるのも、案外イイ勉強になると思ったんだけどな」
「実の息子に向かって馬鹿だの、何の、仮にもそれが母親のセリフか？」と、ルルーシュはしみじみ思う。

父親の性格も大概アレだったが、母親の性格は正直言って論外だ。何が一番タチが悪いと言って、六年前までは『心優しい母親』の仮面を被り続けていた点にある。

何に対しても気丈な女性で、平等を好み、不正を嫌って、強くて、たくましい、憧れの存在だったのだ。

今でも基本的な部分に変わりはないのだが、こんなにも気分屋で、口が悪くて、ガサツで、攻撃的で、ワガママ放題な人物だったとは想像もしなかった。

そんな母親の姿を横目に睨め付けながら、ルルーシュは半分ほど残っていたマグカップの中身を一気に飲み干した。

三十分間、ほとんど切れ目なくひとりで話し続けていたので、純粹に喉が渴いていたのである。

だが、次の瞬間に、苦虫を百匹ほどまとめて嘔み潰した。

「……ッ母さん、これ酒の味しかしませんよ」

「うるさいわねエ」

意識の大半が資料の内容に向いているものだから、邪魔臭そうに言うマリアン又は容赦がない。

「アンタもいい加減、イイ歳なんだからさア、酒の味くらい覚えなさい？」

いい加減、慣れてしまったこととはいえ、ルルーシュは疲れたようにハアと溜息を吐き出した。

「母さん、お忘れのようですが、未成年なんですよ？ あなたの息子は。すくなくとも、まだ数年は」

「だから、どうだって言うのよ？ 母さんなんてね、アンタの歳には、とつくに酒もタバコも男も女も」

「母さん」

言葉を強めてルルーシュが遮ると、マリアン又は露骨に鼻白んだ様子で横目に息子の顔を見下ろした。

「まったく堅苦しいったらありやしない。枢木クンの半分もアンタの視野が広がったら、私も安心して肩の荷が降ろせるんだけどなア」

至極全うな立場で反論をしたはずなのに、理不尽な当てこすりでも繰り返されて。

母親のペースにすっかり流されて、そもそも自分が訪ねてきた一件を忘れていたのに気づいたルルーシュは、二重の意味で眉間に皺を刻んだ。

「……別に狭いとは思いませんけどね、俺は」

「狭いわよ。狭い狭い。見ているこっちの肩が凝っちゃうくらい。自分で言うのもなんだけどね、こつもぶっ散らばった母親から、よくもまアこれだけ真面目一徹な息子が育ったものだと感心しちゃうわよ」

そう言うなり、手元の資料をバサッと空中に投げ出したマリアン又は、視界の端でヒラヒラと紙の束が舞い散るさなか、問答無用でルルーシュの顔を両手の間に挟み込み、頬の上にギューッと唇を押

し当てた。

「愛してるわ、ルルーシュ。あなたの中のシャルルの遺伝子ごと、あなたのことを愛してる」

そのままギュツ、ギュツと顔中に唇を押し付けられて。

ルルーシュはなおさら無然と顔を顰めたが、あいにくこうしたスキンスリップには日頃から嫌というほど慣れていたので、やがて満足したマリアンヌがにつこり微笑みながら顔を離すと、無言で顔中に散りばめられた真紅のスタンプをゴシゴシ手のひらでこすり落とした。

「それは、どうも」

精一杯に羞恥を我慢しているのは、ほんのり赤くなっている目元を見ればわかってしまうわけだが、『あ、そうくる?』と悪戯に目を細めたマリアンヌは、肘掛部分からスルリと腰を滑らせると、強引にルルーシュの膝の上に腰を下ろした。

「……ッう、わ、わ、わっ」

元はといえば、恰幅の良いシャルルが充分にリラックスして寛げるサイズにオーダーメイドしたアームチェアである。

その気になれば、細身の母子がゆったり並んで腰を下ろすことくらい充分に可能なサイズだったが、突然、滑り落ちてきた母親の体重でガタンツと大きく揺れた椅子に慌てたルルーシュは、とっさに横抱きにする形で腕の中にマリアンヌを抱きしめた。

「母さんっ、ふざけるのも大概にしてくださいっ!」

一人前の顔をして苦言を呈する息子の腕の中で艶然と微笑むマリアンヌは、気ままな指先で自分譲りの黒髪を愛しげにくしけずり始める。

「大きくなったわね、ルルーシュ。まだまだ笑っちゃうくらい、中身はお子様のままだけど?」

無然と顔を顰めたルルーシュは、そっけなくマリアンヌの身体から腕を離れたが、それ以上は何を拒むでもなく、母親の好きなようにその身を任せている。

多感な年齢であることを考えると、相手が付き合っている彼女な
らともかく、母親を相手にこんな真似を平然と許して、羞恥を我慢
できるほうがおかしいのだ。

それでもルルーシュが逆らおうとしないのは、決して甘えの気持
ちからではなく、母親を傷つけないように我慢しているのだ。

父親が、そうやって母親を甘やかしていた姿を見て育っているも
のだから、本当は、今にも逃げ出したい羞恥を意志の力で無理やり
抑え込んでいる。

いったい誰が、あなたに父親の役割まで期待しているという
の？

マリアンヌは、アメジスト 紫水晶色の瞳を覗き込みながらそう思う。

シャルルの不在を、ほんのすこしだけ恨めしく思ってしまうのは、
いつも決まってこんな場合だ。

シャルルさえ居てくれれば、ルルーシュだって学生の間くらいは、
お気楽に人生を謳歌することが可能だったろうに。

いや、ルルーシュが本気で望むなら、従業員たちを養うために存
続させている会社なんて潰れてしまっても構わない。

自分とシャルルの血を受け継いでいるルルーシュの才覚ならば、
既存の組織体系でがんじがらめになっている会社になんて頼らなく
ても、もっと自由奔放に生き抜いていくことが可能はずだ。

だから一度はマリアンヌも、当時は九歳だった子どもを相手に「
この先、どうしよつか？」と真剣に相談を持ちかけた。

九歳の子どもなりに真剣に一晚徹夜で悩んだルルーシュは、翌朝
マリアンヌと顔を合わせると、まるきり当然の顔をして「家のこと
は、俺に任せてくれれば良いから」と淡々と呟いた。

まったく誰に似たのか知らないが、ずいぶん不器用な生き方を選
択したものね　と当時もマリアンヌは皮肉な気分を味わったもの
だが。思い出した郷愁に小さく溜息を吐き出すと、ふいに母親の仕

草を取り戻して、胸元にゆるくルルーシュの頭を抱きしめた。

「だから早く大人になりなさいな、ルルーシュ。私の欲しているのは、シャルルの後を安心して任せられる後継者。悪いけど今のあなたでは、まったく話にならないわ」

あなたが意地でも私の勧めを拒むつもりなら、強制的に『家族』という足枷からあなたを解放してあげる。

十五の子どもなりに真剣に家族を守るために必死になっているのでしょうけど、私はあなたにそんな生き方を強制した覚えはカケラもない。

あなたがどれだけそれを拒んでも、あなたが私の息子であるかぎり、嫌でもお気楽な人生を満喫させてあげる　と、婉曲に、なかば強制的に、アッシュフォードではなく皇学園への編入を促がすとしばらく微動だにせず押し黙っていたルルーシュは、ややあつて溜息まじりにマリアンヌの肩口を押し返した。

「　今ね、もう八月なんですよ？」

「それが、なあに？」

しゃあしゃあとマリアンヌが惚けると、さすがにムツとした様子のルルーシュが横目で母親を睨め付ける。

「今から準備を始めて、本気で間に合うとも思ってるんですか？」
決してアッシュフォードの偏差値が低いわけではなく、むしろ標準よりもかなり上のレベルであると断言できるのだが、皇学園はそれの上を行くのだ。

高校入試というよりも、企業の就職試験を前提にしているような試験の有り様は、噂に聞かざりかなり特殊な形式で、面接だけでも三度に分けて実施されるらしい。単純に勉強ができるだけでは、容易に編入することが不可能なのだ。

もちろん、そうした事情を承知の上で、マリアンヌは露骨にハントと声に出して嘲笑した。

「人並みに可愛いことを言うのね、ルルーシュ。ゲンブのところの馬鹿息子にさえ可能なことが、どうしてあなたに不可能なのかしら

？ この私が、十五年も手塩にかけて育ててきた息子の才覚を、あんまり馬鹿にしないでもらいたいものだわ」

しかし、そうは言っても、ひとえにスザクが落第もしないで今日まで無事に通えているのは『スポーツ特待生』の制度を利用しているに過ぎない。

そして、体力面では、からきし自信がないわけだから、ルルーシユは持ち前の頭脳で勝負するしか方法はないのだ。

準備期間、たった残り半年で。

マリアンヌのプライドの高さには慣れているつもりだが、婉曲に「私の息子なら、それくらい可能にして見せなさい？」と言われているも同然のセリフに、思わず返す言葉を失ってしまったルルーシユは、力なく眉じりを下げると、困ったように微笑んだ。

「どうして再婚しないんです？」

マリアンヌは、ほとんど条件反射でムツと唇の先を尖らせる。

「質問の意味がわからないわ。どうして再婚する必要があるのかしら、その必要も感じていないのに」

「不毛だからですよ。今はまだ俺に決まった相手が居ないから、こっうやって母さんを甘やかしてやることも可能ですけどね。俺の性格を考えると、そのうち好きな女でもできれば、家にも帰ってこなくなるかもしれない」

別に、『売り言葉に、買い言葉』で仕返しをしているつもりはない。

単純に、いずれ自分が、マリアンヌやナナリー以外の誰かを一番大切に思う日のことを考えて言ったまでだが。

瞬間的に嫉妬の炎を瞳の中にメラメラと宿したマリアンヌは、「望むところよ」と尖った口調で憤然と息巻いた。

「遠慮しないで、いつだって家に連れてらっしゃいな。コテンパンにダメージを与えて、再起不能に陥れてあげるから」

我が母親ながら、そんな物騒なセリフを心底本気で言わないで欲しい。

今はまだ影も形も見えない将来の伴侶に思わず同情したルルーシユは、何ともいえない顔つきでクツクツと笑い始めた。

「まったく あなたは、ああ言えば、こう言う。結局、俺に一体どうして欲しいんです？」

フンツとすげなく鼻を鳴らしたマリアン又は、ロングのフレアー・スカート裾をバサリとさばいて高々と足を組むと、踵をテーブルの上にドカンと乗せさせた。

身体の本体は変わらず息子の膝の上に預けているわけだから、傍目にはかなり言い訳に困ってしまう格好だが、今更ルルーシユに指摘されるまでもなく、こんなふう息子を独占してられるのも今のうちだけだった。

マリアン又は遠慮なく思う存分に母親の特権を行使して、ルルーシユの我慢強さに付け入った。

「あら、そんなことを、いちいち教えてあげなくちゃ理解できないほど、私の息子は馬鹿だったかしら？」

「馬鹿になりたい気分だから、言ってるんですよ。このままでは、二年間もナナリーから引き離されてしまう」

「二年もあれば充分じゃない？ ナナリーが無事に皇学園へ編入を果たした暁には、おそらくゲンブの息子は、かつての親友のたつての希望で、どこかしら遠方に住まいを移す選択を迫られているはずですからね」

「……………」

「いい加減、腹の探り合いはうんざりだと言っているのよ。ルルーシユ、あなたは今夜、その許可を求めるために、私の元を訪ねたはずよ。違って？」

母親のご機嫌取りのつもりで、戯れに付き合っていたつもりが、やはり追いつめられていたのは自分のほうだったか。

眉間に銃口を突きつけられて、「白状なさい？」と言われている気分のルルーシユは、意識的に視線を外してフーツと大きく息を吐き出すと、苛立たしげに前髪をかき上げた。

「……それでも母さんは、ナナリーを応援しているんでしょう？」

「当然でしょう？ さつきも言ったと思うけど、アレはアレで立派にゲンブの教育方針なんですもの、一概に枢木くんだけ責めるのは酷つてものだわ。どっかの誰かさんみたいに真面目一徹のガツガチで青春時代をやり過ぎちゃうよりも、それなりに遊ぶことを知ってる男のほうか、家庭に入ると落ち着くものだしね」

「ハッ、馬鹿馬鹿しい、結婚と恋愛は別物ですか？ だったら母さんは、俺が同じことをしても平気なんですね？」

「ルルーシュには無理だわ。三人いれば、三人とも同じ温度で愛してしまうもの。挙げ句の果てに、三すくみ状態で睨み合う女たちの中央で身動きが取れなくなつて、途方に暮れてしまうのがオチね。自分でもその自覚があるからこそ、今はナナリー以外に意識を向けないように、心の目を閉ざしているのではなくって？」

「……ッ」

「まったく、そんなものが理由で、十三年越しの恋路を邪魔されたんじゃ、ナナリーだっていい迷惑よ。まさに不毛な兄妹愛ね」

前髪に指を絡めたまま、しばらく固まっていたルルーシュは、くしゃりとそれを握り潰した。

「……だからと言って、今のスザクが適任だとは、とても俺には思えない」

スザクの態度を客観的に判断するかぎり、ルルーシュが余計な口出しをしなくても、万が一にも成就の見込みは無いとわかっている。

それでも、「ナナリーが、今でもスザクに心を奪われている」という事実が、ルルーシュには我慢ならないわけだった。

マリアン又はルルーシュの手の甲に手のひらを重ねると、そっけないくらいの仕草で鷲掴んでいた髪の束から外させる。そして、乱れていた前髪を撫で付けると、クスリとあきれたように微笑んだ。

「まったく、あきれた潔癖症ね。いったい誰に似たのかしら？ ああ見えてシャルルも、若い頃にはお盛んだったものだけだ」

ある意味これも、『トンビがタ力を生んだ』というのかしらね？

とマリアンヌは、まっすぐに育った息子の成長ぶりにしみじみ目を細める。

だが、今はまだ『からかわれている』としか判断することの出来ない愚かな子どもは、目の下に不快の皺を刻み込むと、露骨に不機嫌そうに「ハッ」と鼻を鳴らした。

「それでも母さんは、平気だったわけですか？　だとすれば、本気で気が知れない」

「だって、考えてもご覧なさいな。私が生まれた時には、シャルルはもう既に青年と呼ばれる年齢だったのよ？　それまで独り身で居て欲しいなんて、求めるほうがナンセンスだわ」

「……」

ルルーシュの瞳が、もどかしそうにマリアンヌを睨め付けて。

『そんなことを問題にしているわけではない』と言わんばかりに、悔しそうに唇を噛み締めた。

「いったい、誰に似たのかなんて、訊ねるのすらナンセンス。」

自分とシャルルが出会って、恋をした。その気持ち、一番純粹だった時代に産まれた子どもがルルーシュ。

たとえばどちらの気質を受け継いでいなくても、最後の瞬間まで純粹だった愛情に育まれた子どもが、それ以外の感情を受け取っているはずもない。

その気持ちを、いちいち言葉にして伝えてやるほど甘くはないマリアンヌは、ふいに優しく目に目を細めると、「ふふっ」と息を洩らして微笑んだ。

「懐かしい話だこと。どっちにしろ結婚前の話だしねエ。結婚後のいきさつに関してなら、ルルーシュ、あなたもよく覚えているはずじゃない」

悪戯に、妖艶に、巧みに言葉を操る女の姿から一変して、少女のように可憐に微笑んで見せる笑顔の美しさ。

たしかにルルーシュは、両親がいがみ合っている姿を、ただの一度も目にした覚えが無かった。

いつだって小春日和の雰囲気で、仲睦まじく寄り添っている大変の
仲の良い夫婦だったのである。

親子ほど歳が離れているせいか、父親は母親にどんな小言を言われても、「うむ」と鷹揚に頷いて見せるだけで、勝手気ままに手のひらの上で転がしている印象が強かった。

すくなくとも、ルルーシュの認識ではそうだったはずだが。

ひよっとすると自分が知らないだけで、二人が付き合い出した当初には、相当各地で血の雨が降り続いたのではないだろうかと思像して、思わず背筋がゾツと冷たくなるのを感じながら、ルルーシュは心の中でこっさり父親に同情した。

「……ッと、あつ、こ、こら、ルルーシュ！ 何をするのっ」

おもむろに横抱きしたまま「よいしょ」と腰を上げると、振り向きざまにドサリと椅子の上にマリアンヌを座らせた。

身長では既にマリアンヌの上背を上回っているとはいえ、仮にも相手は成人女性である。実際行動を起こしてみれば、予想外にかなり気合を要する作業だったので、いかにも大仕事をやり終えたと言わんばかりに、鼻からフーツと息を吐き出すと、わざとらしく両手をパンパン打ち合わせた。

「母さん、いつまでも『美人女社長』を自認したいなら、そろそろワークアウトに励んでみたらどうです？ 随分と下半身が抱き心地の良い身体にお成りで」

「うっ、うるさいわねっ、忙しいんだから仕方がないじゃないっ」
まさかにも息子の体格で自分を抱き上げてしまえるとは思わずに珍しく露骨に動揺しているマリアンヌは、耳の付け根のほうまでうつすら赤みが差している。

そんな顔で憎まれ口を叩いても、男なら誰しも悦に入ってしまうだけだろうにと、ずいぶん意地の悪い感想を抱きながら、ルルーシュはそっけなくきびすを返した。

「親父の二の舞だけは、勘弁してくれと言ってるんです。俺が世話を焼いてやれるのも、半年間だけなんですからね？ その間に、自

力で何とかしてくださいよ」

厭味つたらしく言いながら傍を離れると、たちまちマリアン又は大きな声で嘔み付いてくる。

「それは、あなたのほうこそだわ、ルルーシュ！」

「……どういう意味です？」

ルルーシュは、その場でピタリと立ち止まると、肩越しにマリアンを振り返る。

マリアン又は珍しく、言ったことを後悔しているような表情で視線を逸らした。

あらぬ方向を睨んだまま口を閉じていたマリアン又は、ややあつて忌々しげに舌打ちすると、溜息まじりに呟きを吐き出した。

「……つまらない生き方をするのは止めにして頂戴と言っているのよ。ナナリーの被保護者を気取らせるためだけに、あなたを産んだのではないのですからね。この半年間で果たして、あなたが進路を変えるにふさわしい、本当の理由が見つかれば良いのだけど？」

この親にして、この子あり。

回りくどい言葉を用いながら、結局はたがいに相手の心配をしているだけである。

ルルーシュは鼻の先でフンツとせせら笑うと、そのままカッカッと足早に歩んだばかりの距離を戻った。

それだけでもマリアン又は驚いている様子だったが。ルルーシュが何の躊躇いもなく腰を屈めて、頬に軽くチュツと唇を押し付けると、満面に驚きの表情を浮かべて、口を半開きにしたままポカンとルルーシュの顔を凝視した。

「……な、何よ、突然。……珍しいこと」

言われて、たしかに六年ぶりかな？ とルルーシュは考える。

父の死後、ただの一度も、寂しい思いを味わってないと言えは嘘になる。

だが、それでも、母に対して文句のひとつも言う気になれなかったのは、マリアン又は自分に寄せてくれている信頼を裏切りたくない

いと思っていたからだ。

だから、仕事先で神経をすり減らして、疲れて帰ってきた母親がせめて安心して笑ってくれるように、自分でも馬鹿だと思える背伸びを当然のように続けてきた。

そんな自分の姿が、おそらくマリアンヌの目には自虐的に映ってしまうのかもしれないが。

何気ない日々の端々で、マリアンヌとナナリーが以前と変わりなく見せてくれている屈託のない笑顔が、どれだけルルーシュを勇気付け、満たしてくれているのか、マリアンヌが正確に把握し切れてないだけだ。

「……あなたがそういう人だからね、いつまで経っても俺は、親離れができないんですよ、母さん」

自分でも会心の笑みだと思う表情で言って、すばやく反対側の頬にチュツと唇を押し付けると、明らかに動揺しているマリアンヌをひとり残して、書斎のドアに向かって駆け出した。

「……ツちょ、ちよつと待ちなさいっ、ルルーシュ!」

「おやすみなさい、母さん」

怒っている顔で叫んだマリアンヌの顔を一瞬だけ眺めて、ルルーシュは慌ただしくおやすみの挨拶を書斎の中に閉じ込めるようにしてドアを閉ざした。

マリアンヌの顔もずいぶん血色が良くなっているのに気づいていたが、自分の顔も負けずに同じような状態であるのに気づいていたので、そうした。

思わずククツツと笑い出してしまったルルーシュは、閉じたばかりのドアにひたいを押し付けると、ハアと大きく溜息を吐き出した。なんか、本当に子どもみたいだなと自分でも可笑しく思ったが、考えてみれば、何の躊躇いもなく甘えることが許される子どもでいられる期間も、あんまりそう長くはない。

だったら、せめて受験が終わるまでの半年くらいは、普通に子どもらしく振る舞ってやるのも、案外悪くはないかもなと意地の悪い

気分で思いつつ。クスクスと愉しげに笑いながらルルーシュは自室に向かった。

そして、半年後。

Xデーは訪れる。

目覚めの瞬間こそ緊張感を抱えていたものの、いつものように朝食を作って、ふたりを起こして、ワイワイ言いながら、一緒に食べて、ひとつずつ毎朝の習慣を完遂するうちに、程よく肩から力が抜けていくのを実感して。

やがて家を出る頃には、すっかり絶好のコンディションで試験会場に向かったルルーシュは、『我ながら、本番に強いタイプだな』と感心するほどの落ち着きぶりで、何の支障もなくすべての予定を消化した。

あまりの呆気なさに、「なんだ、この程度のレベルだったのか？」と肩すかし感を味わったほどである。

「ん？」

集中力を乱されるのを嫌って、朝から電源を切っていた携帯電話をONにすると、すかさず着信のランプが点滅した。

大半は仲の良いクラスメイトからの激励のメッセージだったが、家を出る直前までさんざん激励してくれたマリアンヌと、ナナリーからも一通ずつメールが届いているのに気づいた。

ルルーシュは苦笑を浮かべながら、先にナナリーのメールを開封した。

『お兄さまへ』

とうとう試験の当日ですね。

今でもちよっぴり複雑な気分ですけど、それでもやっぱりお兄さまと一緒にいてくださるほうが心強いな。

がんばってください、応援しています（はあと）』

ルルーシュは、思わずやに下がってしまいそうになる表情を引き締めるのに苦心した。

この半年間、余分なことは何も訊ねずに、静かなる観察を続けた結果、ナナリーも熱烈にスザクを恋い慕っているわけではなく、むしろ潔く過去を振り切るために行動を起こすことにしたらしいと、一応の確信は手にしていたので。

だったら何も京都くんだりまで出かなくても良さそうなものだが、今までずっと家族に守られ通して生きてきた自分に対する戒めも含んでいるらしい。

そうなってしまうと必然的に、あの甘えたがりの母親を放置してしまう結果に陥るわけだが。

どのみちルルーシュは、大学入試に際して再び都内に戻る予定を立てていたので、一年ぐらいなら、むしろ意識的に放置しているほうがマリアンヌのためになるのではないかとルルーシュは考えた。

マリアンヌも自覚していることだが、手近な場所に都合よく自分を甘やかしてくれる人間が存在しているからこそ、未来に目を向ける必要を感じていないのだ。

しかし、ルルーシュを通して間接的に、どれだけシャルルを恋しがって見たところで、死んだ人間は帰らない。

そんなものは、単なる一時しのぎの感傷だ。

そうそういつまでも、息子である自分が母親の相手を務めるわけには行かないのだから　と思うのと同時に、それはルルーシュ自身に対する戒めでもあった。

要するに、一緒にいて心地好いのだ。

表も裏も、弱い部分も、強がりも、すべての部分を見透かされているから、変に見栄を張らないでいられるぶん、下手をするとナナリーと一緒にいるよりも心地好いと感じてしまう場合がある。

もちろん、心地好いと感じる以上にム力つく部分も多かったが、それはマリアンヌを通して自分の姿を見せ付けられているからだ。六年前までは単純に敬慕の対象であつたはずが、今では自分の分身のような存在として親愛の情を感じている。

ほかの誰と一緒にいるよりも、母親と一緒にいるのが楽だから、何を考えているのかわからないクラスの女子などに、いまさら目を向ける必要を感じていないのだ。

だが、それでは、問題があるのもわかっている。

マリアンヌにも言われたように、このままでは人としてあまりに不完全であり、子どもであり、近い将来お互いに駄目になってしまうと考えたから、半年のうちにルルーシュは、自分のために改めて親元を離れる決心を固めた。

もともと、そうそう簡単には離してくれそうにない雰囲気だな。

ルルーシュは苦笑まじりに、マリアンヌのメールを開封した。

「ルルーシュへ。」

京都の高島屋で、いつものアレを買ってきて頂戴。

それ以外のお土産は一切不可。

ああ、そうそう、知つてると思うけど、今夜は宴会だからね。

全力でまっすぐ帰ってらっしゃい」

脱力するしかないルルーシュは、ハアと力なく溜息を吐きこぼす。どこの母親が、受験に出かけた息子に、土産物の催促をするのだ？ そう思つだに、あきれ返ってしまうばかりだが、要するにマリアンヌは、試験の結果に不安を感じていないのだ。

ルルーシュ個人に対する信頼よりも、「仮にも私の息子なら、編

入試験のひとつくらい楽勝で受かって見せるのが当然でしょう？」
と完全に頭から決め付けてしまっている。

そして、十二分に期待に応えた自信のあるルルーシュは、大威張り
で電話を一本かけてやることにした。

宴会とは言わずもがな、受験が終わった内祝いを兼ねているのだ
が、実のところは二ヶ月遅れの誕生日パーティーだ。

仲の良いクラスメイトからは誕生日当日に祝ってもらったが、一
応自宅では自粛したわけだ。

何しろ、ルルーシュの誕生日だろうが、なんだろうが、料理全般
を用意するのはルルーシュの担当だったので。

だから今夜も、受験が終わったばかりの息子をさっそくこき使う
ために、「全力でまっすぐ帰ってらっしゃい」と命令しているわけ
だ。

「まったく、なんて母親だ」

口では憎まれ口を叩きつつも、やっぱり憎めないマリアンヌのや
り方を結構悪くない気分で見つみつ、母親の電話を呼び出すつい
でに、なんとなく辺りに目を走らせる。

皇学園のある所在地は風光明媚なことでは有名な場所だったが、何
しろ交通利便の悪い場所だったので、京都市内の公会議事堂を試験
会場に割り当ててあった。

町の中心地からは程よく離れた場所だったので、そこはかとなく
京の匂いの漂う閑静な住宅街のはずだったが、建物から出てすぐの
場所から延々数十メートルにもわたって、父兄たちの姿や、車の数
でこった返している。

中三にもなって、たかが高校入試の会場に保護者の同伴が必要か
？ と学生服の群れに向かって侮蔑の情を抱いてしまうが、思わず
ルルーシュが眉間に皺を刻んでしまったのは、単純に電話が繋がら
ないせいだった。

ひょっとして会議中か？ とも思ったが、ルルーシュのほうから
電話をかけることが滅多にないせい、得意先の接待中だろうが、

いつだってマリアン又は息子の電話を優先させるのだ。

とりあえず十コール目まで待ち、ルルーシュはフウと吐息しながら電話を切った。

無事に試験が終わった旨の報告と、食べたい物のリクエストを聞きただけだったので、別に構いはしないのだが。

先に土産物の買い物を済ませて、（ちなみに、ナナリーには仕立ての良い西陣織のシヨルダーバックを見つけたので、ついでにそれを購入して）、駅に向かう道すがら、もう一度電話をかけ直してみたのだが、やっぱり繋がらなかったたので、仕方なくメールで用を済ませた。

「まったく、なんて母親だ」

今度のそれは、いささか不満の色が濃く出てしまう。

半年間、着々と積み重ねてきた努力の軌跡を一番間近で見ている知っているわけだから、ようやく解放された喜びと一緒に共有してもらおうと思っていたのに。

柄にもなく不満に思ってしまうのは、どうやら試験会場にまで押しかけてきた父兄たちに囲まれて、一喜一憂していた生徒たちの姿に感化されている部分があるらしい。

子どもか、俺は。

馬鹿な感傷を鼻の先でフツと笑い飛ばして、潔く気分を切り替えたルルーシュは、まずは試験終了の報告をするために、一度アッシュフォードに戻ることにした。

新幹線のコンコースで電車待ちをしていると、たまたま試験会場が一緒だった学生服の少年が、もう次のすべり止めに向け英単語帖をひっくり返しているのに気づいて、ルルーシュは『大変だな』と他人事のように肩をすくめた。

結果が出るのは二週間後。

次にこの駅のホームに立つのは新年度だ。

ルルーシュは、両腕を伸ばして大きく伸びをすると、ふぁあとと屈そうにアクビした。

SCENE・002 : 消せない記憶

人の記憶というものは、結構曖昧なものである。
知らぬ者は少ないけれど、忘れている者は実に多い。

半年前まで、毎日のように使用していたガーデンテラス。

いつの間にかそこに突っ伏して眠っていたのに気づいたルルーシユは、全身にゾクリと走った悪寒で目を覚ました。

目蓋が重い。涙で霞んで、あんまりよく見えない。顔中が寒さでひりつくようだった。けれども、吐く息だけが妙に熱くて息苦しい。寒いはずだ。冬剪定を終えたツルバラ。薔薇の休眠期である冬場に、一切の葉を落として、不要な枝を排除して、取り残された苔色の枝だけが、屋敷の壁面に未練たらしく這い回る。庭先には一面に短く刈り揃えられた枯れた冬芝。

濃い鼠色ねずみにどんより曇った空からは、桜の花びらのように大きな雪がヒラヒラと無数に舞い落ちている。

それが「雪」だと認識するまでに、またしばらくの時間を要して。茫然と魅せられたように雪の降るさまを眺めて。ふいに視線を落としてみれば、さっきまでルルーシユが突っ伏していた大理石のテーブルの上にも、二、三センチほど雪が降り積もっているのに気づいた。

ルルーシユの体温に邪魔されて、降り積もることのできなかった面積に残る人型。

まるきりピカソの描いた抽象画のようだなとルルーシユは思った。たまらなく寒い。息を吸うたびにヒュー、ヒューと音がするのは、おそらく発熱しているせいだろう。

そうだった 薬 何でもいいから、解熱剤。そして、栄養を補給できる食べ物。

それを買ったために、家から出てきたはずだったのに　俺は、一体こんなところで何をしているのか。

死にそんな気分だった。　いいや、いつそのこと　もう死んでしまいたい。

母さん　ナナリー　誰でもいい、　父さん。

俺が今、生きていることを知っている誰か。　誰でもいい。

助けてくれ。それが許されないならば、もういつそトドメを刺してくれ。俺が一体何をした？　何をしたと言っただけ？

枕代わりにしていた右腕をほんの少しだけ動かそうとしただけで、脳天に突き抜けるような痛みがあつて、一瞬視界が血の色に染まった。

ただでさえ寝起きで動きづらい身体を酷使して、身体中の筋肉をギシギシ軋ませながら、腰から根が生えているような椅子からぎこちない仕草で立ち上がる。

「……………出かけなきゃ……………」

ほとんど言葉にならない呟きが、妙にざらざらと凍てつく空気を揺るがした。

視界一面に、天使の羽毛のように舞い落ちている雪の花びら。

ああ、ナナリーの笑顔みたいだなと、うつとり微笑んだ瞬間に。

ルルーシュは、また一度、崩れ落ちるようにして、その場で意識を失った。

「ル・ルー・シュ！」

創立二百年の歴史を誇るアッシュフォード学園。

学園全体の敷地面積は一体どれくらいになるのだろうか。

落ち着いて眺めるほどに、なにやら欧州アイルランドのトリニティ・カレッジを彷彿とさせる雰囲気だった。

学園のぐるりを囲った深緑の効果を十二分に活かす形で設えられてある外観は、そこここに曲線や植物のデザインを積極的に取り入れてあり、どうやら十九世紀末フランスの装飾美術^{アール・ヌーヴ}を意識しているように思われた。

動力源のひとつとして小川を模して建物の周囲を取り囲み、至るところで爽やかな水音を立てている水路。

正門から校舎の前までまっすぐに伸びているオブジェの左右相称^{シメトリック}。十二年間、ほとんど毎日のように、眺めていたはずの風景だった。

こうして改めて眺めてみると、意外に離れがたく感じてしまっ
うから不思議なものだよな……。

自分で選んで、決めたこととは言え、何の不満もなく過ごしていたはずのアッシュフォード時代。

そこでの生活を捨ててまで、自分は今、何の魅力も感じていない皇学園への編入準備を進めている。

きっかけは、スザクに対する反発心だった。

それが今では、自分の将来に対する反発心にまで成長しているのだからおかしいものだ。

「別に、アンタさえその気ならね、シャルルが残してくれた会社なんて、いつだって潰して構わないのよ」

ルルーシュが十五の誕生日を迎えた夜に、マリアンヌはウィングラスを傾けながらそう語った。

しかし、それでは従業員の生活が とルルーシュが至極全うな反論を口にする、マリアンヌはクツクツと愉しげに喉を鳴らして笑って。

「ナナリーがいるじゃないの。あの子にも『継いでみる?』と一度くらい訊ねてあげなきゃフェアじゃないものね。あの子が別の人生を望むなら、今までどおり私がいる。今もって三十五歳の美人女社長が、そうそう簡単にくたばってたまるモンですか」

むしろ、そのうちアンタのほうから、「お願いですから、継がせてください」と頭を下げてくるような、面白みのある企業に成長させてあげるわよ　と女王然とした雰囲気で、物騒な笑いを浮かべていたマリアンヌの微笑み。

まったく、この母親は　とルルーシュは心底あきれたものだが。自分でも、もっとあきれてしまったのは、『だったら一度、徹底的にルールを踏み外してみるか』と、なかば軌道の決まり切っていた将来の縮図を、完全に一度白紙にする決意があっさり固まってしまったことだった。

自分の力だけで事業を起こして、ランペルージ家　果てはアツシュフォード家や、皇、枢木家にも負けない成功を、この掌中に掴み取ってみたい。

「家の名に振り回される人生など、俗世に縛り付けられておる凡人の生き方よ」　と言って皮肉に笑って見せたのは、誰あろう、父親であるシャルルの口癖でもあった。

野心家の両親を持つと、その子どもは、単純に生きるのもなかなか困難なものだな……。

穏便に、平穩に、与えられた人生を満喫するつもりでいたのに。何より困ってしまうのは、両親の考え方を『悪くない』と受け止めてしまっている、自分の考え方だった。

環境面では、まったくもって魅力のひとつも感じていない場所だが、単純に人脈を築くといった面に関しては、皇学園以上に望ましい環境はない。

ためしに一度、青田買いでもしてみる気分で、将来的に手駒とし

て使えそうな人材を見繕つてみるのも悪くないかもな　と完全に父親からの受け売り文句を、自らの実感として噛み締めながら、ルルーシュはフツツと不敵に微笑んだ。

「やらしい男ねエ、何をひとりでニヤついてるのよ？」

「　　ッほわあああつ！？」

誰もいないと油断していたところを、突然背後から声をかけられて。

ついでに背中を容赦なくバシツと殴られて、奇声を発しながら軽く吹っ飛んだルルーシュは、わたたたと無様な格好でたたらを踏む。

「ッ…力、カレンかつ。　　おつ、脅かすなよっ」

心臓をバクバク言わせながら振り向くと、そこには見慣れた少女の姿を見つけた。

紅月カレン。　またの名を、カレン・シュタットフェルト。

幼稚園に入学した当時のクラスのメイトだが、彼女も幼い頃に父親を亡くしており、後に母親が再婚したために名字が変わった。

昔はあんまり話した記憶がなかったが、彼女の義理の父親が、たまたまルルーシュの父親の会社の取引先の社長で。

葬儀の際、カレンがクラスの代表で弔問に訪れたのをきっかけに、なんとなく友達付き合いを始めるようになっていた。

よくよく知り合ってみれば、とにかく二人は負けず嫌いなところが非常によく似ていて。

六年間、ことあるごとに、小テストから、期末テストに至るまで、学年のトップ争いを繰り広げた仲でもあった。

負けん気が強い上に、我も強くて、喧嘩っ早くて、口も悪い。

まるきりどつかの誰かさんみたいだなと感心する程度には小ざっぱりした性格で。ほかの女子たちと比べると、あまり女を意識しないで付き合える気安さが、何よりルルーシュを安心させたのかもしれない。

それでいて体型だけは一人前に、ほかの女子には誰にも負けない

くらい女性的な変貌を遂げてしまうのだから、女という生物は、やっぱりワケのわからない存在だとルルーシュは思う。

見るからに胸部と腰周りが、はちきれんばかりに窮屈そうなパステルピンクの中等部の制服に身を包んでいるカレンは、両手を腰に大威張りで胸を張って噛みついた。

「なによ、呼んでも返事もしないで、ニヤついてるアンタが悪いんでしょ？」

あ、そうだったのか？ と呼ばれたことに全然気づいてなかったルルーシュは、あっさり開き直って目をすがる。

「だからといって、女が気安く手を上げるな」

「うるさいわね、この軟弱者」

「黙れ、暴力女」

「ひよるなが、モヤシ、口八丁、ダメ人間」

「なんだと、このっ」

「なによっつ」

つつけんどんに言い合いながら、さりげなく隣に肩を並べてきたカレンは、横からじっとルルーシュの顔を覗き込む。

「考え事だった？」

「いいや、別に？」

突然、真面目な顔で訊ねられ。一瞬の虚をつかれたルルーシュは、とつさに否定の言葉を口にする。

だが、それでもカレンが、何やら妙な心配をしていることは目の色を見ればわかってしまうことだったので、仕方なく、苦笑まじりにお茶を濁した。

「まア、いろいろな。俺だって、たまには考えることくらいあるさ」「いろいろねエ……」

カレンは露骨に胡散臭そうに目をすがめて、呟く。

それきり興味を失くしたように、あっさり視線を外してしまうと、何も言わずにルルーシュのペースに合わせてブラブラと歩みを進めながら、腰のところで後ろ手を組み、足元の小石をつまらなそうに

蹴っている。

そのまま「じゃアね」とでもひとこと言い置いて、あっさりきびすを返してしまいそんな雰囲気だが、カレンが自分の帰りを待っていたことくらい、とつくに気づいていたルルーシュは、クスリと優しげに微笑むと、自分のほうから話を促した。

「聞いてもいいぞ?」

「何の話よ?」

つつけんどんに言うクセに、嘘のつけない性格のカレンは、たちまちちよつと動揺している感じに唇の先を尖らせる。

こんな場合のルルーシュは、自覚の無いところでマリアンヌに非常によく似ていて。『あ、そう来る?』とつまらなさそうに目を細めると、真顔で「そうか」と突き放すように呟いた。

「俺の気のせいかな。いや、いい。忘れてくれ」

「はア? ちよつと、勝手に自分だけ納得しないでくれる?」

「いや別に、俺はどっちでも構わないんだけどな」

「だから、いったい何の話よ? アンタって、時々ワケわかんないっ」

必死で惚けようとしているが、本当は今にも聞き出さたくてウズウズしているのだ。

しかし、それを聞くために、ルルーシュの帰りを待っていた事実を認めたくないものだから、もどかしそうに焦れながら、どんどん機嫌を傾けさせていく。

考えてみれば、朝、家を出てから丸半日、事務的な会話以外は誰とも交わしていないのだった。

おそらく無意識のうちにも張っていた気がゆるんで、ホツとしている部分も影響しているのだろう。思わず調子に乗ったルルーシュは、しばらく意地の悪い方法で焦らしてカレンの反応を愉しむつもりでいたのだが、精一杯に引きしめていたつもりの口元が、ピクピクと小刻みに震えているのに気づかれて。カッとしたカレンは問答無用で、ルルーシュの背中にドカンツと体当たりをかましてきた。

思わずちよつと吹き飛んでしまったルルーシュは、辛抱たまらずクックツと身悶えしながら笑い始める。

「暴力反対」

「うるさいわねっ！ いいから、さっさと白状しなさいよっ！！」
言っている最中にも、ドカンツドカンツと遠慮なく小突き回されて、ルルーシュはハツハツと陽気に笑い声を上げながら「受かった」とあっさり白状した。

「えっ、だって、合格発表は？」

「二週間後」

「はあっ？ だったら、何えらそうに断言してるのよ！？」

「断言くらい、したくもなるさ。ペーパーテストだけなら、俺、満点取った自信がある」

「っへえ？」

「なんだ、信用しないのか？」

意気揚々と言ったルルーシュを、嫌そうに見つめたカレンは、露骨に半眼でせせら笑った。

「だって私、あの学校の編入試験で、面接だけで落とされたって話、いくらでも知ってるもの」

たしかに、それは事実である。

「だからって、おまえなア、デリカシーのない奴だな。そういう話を、受験生の前で口にするか？」

「いまさら気を遣ったって始まらないじゃない。だいいち私は、アంతに試験に受かって欲しくないんですからね」

そっけなく言って、ゴソリとポケットに手をつ込んだカレンは、「はい」と手のひらサイズの小箱を差し出した。

何の躊躇いもなく受け取ったものの、中身に見当のつかなかったルルーシュは、怪訝そうに首を傾げる。

「なに？」

「ハッピー・バレンタイン。一日遅れだけど」

「ああ、そっか。サンキュ」

自分が興味のないことに関しては、いくらでも自分に都合よく鈍感になってしまえるルルーシュは、にっこり微笑むと、あっさりそれをカバンの中にしまった。

予想していたこととは言え、さすがにカレンは物騒な顔つきで、不機嫌そうにルルーシュを睨め付ける。

「アンタねエ、もうちょっとくらい、マシな反応が出来ないわけ？ 万年デリカシー欠損症っ！」

「そんなことを言われてもなア、今更なんて言えばいいんだ？ 俺の気持ちなんか、とくに知ってるじゃないか、おまえ」

ぐうの音も出ないほどに、あっさり言い負かされてしまったカレンは、悔しそうに一瞬きつく拳を握り締め。

その手を、ずいっとルルーシュの面前に差し出した。

「返して」

「なんで？」

視界の片隅で、傾き始める大きな太陽。決してそれに照らされているせいばかりでなく、顔を紅潮させているカレンが、差し出した指先をプルプル小刻みに震わせる。けれども、口にした文句は至って冷静なものだった。

「私だって、今更へんな期待なんかしやしないわよ。それでも、それなりに緊張ぐらいはしてるんだから。そんな自分が、馬鹿みたいじゃないの」

てつきり試験の結果を聞くために待っていたのかと思いきや、どうやらコイツも、受かることを頭から信じて疑いもしないらしい。

期待に応えた自信は十二分に有るとはいえ、ここまで誰も心配してくれない状況というのも、意外につまらないものだなと考えて、ルルーシュは無造作にカレンの手を掴み取ると、「いやだ」とすげなく断る。

「なッ…、アンタっ、ナニサマのつもりよっ!？」

「そっ、怒るな」

なおさら激怒したカレンは、カ一杯ブンツと腕を振り、すかさず

振り払おうとしたのだが、ルルーシュが意地でも離そうとしなかった。強引に手を繋いだまま、歩き始める。

「ッ…ちよつと、このバカッ、ルルーシュッ！ 離さないよっ！」
「いやだ」

「なんでっ？ ツ…どうせ私なんか、眼中にないんでしょっつ？
なんで優しくする必要があるのよっ！？」

「なん、かじゃなくて、大切な友人だからだ」

三十メートルほど離れた視界の片隅で、渡り廊下を歩む数人の人影。天下の往来で、派手に痴話喧嘩を始めている二人の様子を冷やかに半分で眺めているのに気づいて、ルルーシュは相手を射殺しそうな視線でガンを飛ばした。

遠目にも下級生だとわかる人影が鼻白んだ様子で肩をすくめて、ぼちぼちと目当ての場所に向かって退散した。

「…かつ、勝手なこと、言わないでようっ」

その間にも、ぐいぐい手を引つ張られながら歩くことを強制されていたカレンの声音が、泣いてる感じにちよつと震えて。ルルーシュが視線を移すと、カレンは泣いてはいなかったが、それは単に彼女が我慢しているだけだった。

ルルーシュは、短くフンツと溜息を吐きこぼす。

「どっちが勝手なんだ？ おまえに惚れてる男じゃなきゃ、優しくしちやいけないのか？ だったら、なんでそっちこそ、俺、なんか優しくする必要があるんだ？」

「好きだからに決まってるでしょうっ！？ 悪かったわねっ！ このロクデナシの唐変木っ！」

「誰も悪いなんて言ってないだろう？ 俺だってカレンが好きだ、友人としてな。俺はいつだって真面目に答えてるのに、なんで気持ちに依じてやれないからって、『友人以下』の烙印を押されなきゃいけないんだ？ いつだって勝手なのは、おまえたち女のほうだろうっ？」

「…ッ最低っ！ ツ…アンタなんかっ…、好きになるんじゃないっ

たっ……!!」

ついに我慢し切れずに、ボロボロツと大粒の涙をこぼしたカレンは、手のひらに顔を埋めて号泣してしまった。

しかしながら、まったくタチの悪いことに、ルルーシュは友人として付き合っていた六年のうちに、こんなふうにカレンを泣かせることすら慣れてしまっていた。

もちろん言い争いの内容は、完全に色恋とは無縁のものだったが、自分の言い分が正しいと思ったら、相手が泣こうが、キレようが、徹底的に相手を言い負かすまで納得できない性分だったから、時には小テストの解答に対する意見の相違なんて理由で、カレンをたびたび泣かせてしまった実績が存在しているのだ。

受験組みに対する配慮で、今週一杯は午前中だけの短縮授業。

おかげで、普段の放課後に比べれば、閑散としているのが幸いしていたが。泣きながら「離してっ!」としきりに暴れ回って、力づくで足を踏ん張るカレンを、強引にズルズル引きずりながら歩みを進めて。ようやく最寄りのベンチまで辿り着いたルルーシュは、汗だくでグツタリ腰を下ろした。

カレンも素直に腰を下ろしたが、何のことはない、思い切りカ一杯泣くためにそうしただけだった。

丸々五分近くも、ワンワン声を上げて泣いていたカレンは、やがてヒクツ、ヒクツと小さくしゃくり上げながら顔を上げると、むずかる赤ちゃんみたいに顔を真っ赤に上気させたまま、「……ごめん……」と小声で謝罪を口にした。

ルルーシュは軽く肩をすくめると、五分前からスタンバイして持っていたペットボトル入りのスポーツドリンクをそっけなくカレンの手元に押し付けた。

「ほら」

「……………」

「いいから、ほら。水分補給」

水分補給が必要になるくらい泣かせておいて、まったくいい気な

ものだったが。

完全に放心状態で動く気になれないのを察して、ルルーシュは構わずてきばきとペットボトルの蓋を開けると、カレンの手を持ち上げて、両手で握らせた。

何の変哲もないペットボトル。白いパッケージが印象的なそれは、普段からルルーシュが好んでいる銘柄で。すっかり常温に戻っているそれは、中身が半分ほどしか残っていなかった。

カレンはしばらくじつと無言でそれを眺めて。

疲れたように小さく溜息を吐きこぼすと、素直に口に運んで、コクリと一口嚥下した。

深まる吐息。まるで熱いお茶を飲んだ後のようだった。かすれた声音が、無感動に低く囁く。

「……ラッキー……」

「なにが？」

「間接キス」

「馬鹿か、おまえ。いまさら」

泣かせた詫びに、ルルーシュはいつだって、そのときの自分に出来る精一杯で世話を焼く。

今までにも、さんざんこうして世話を焼かれているわけだから、ルルーシュに他意がないことくらい、カレンがいちばん身に染みて実感していることだった。

けれども、今はその落ち着き払った態度の、一挙手一投足が腹立たしくてたまらなくて。

単純に世話焼きの一環として、事前に用意しておいたハンカチとポケットティッシュをワンセットで差し出され、カレンは無言でそれを受け取ると、鼻をちーんと鳴らしてかみながら、「してよ」と尖った口調で噛みついた。

「大、大、大切な友人なんでしょ？ だったら、してよ、キスくらい」

「お断りだね」

あっさり拒絶したルルーシュは、カレンの手元から無造作にペッ

トボトルを回収すると、残っていた中身をゴクゴク喉を鳴らして一気に飲み干した。

用済みのペットボトルを最寄りのゴミ箱に投げ入れると、足を組み、膝の上に頬杖を寄せさせる。

「俺だつて、それくらい想像できるんだ。好き合ってもいないのにキスなんかしてしまつたら、将来おまえに本気で惚れた男が絶対傷つく。そしたら、おまえも傷つくだろう？ そんな馬鹿馬鹿しいことに、巻き込まれるのはゴメンだ」

カレンは、しみじみ溜息を吐き出した。

「……アンタって、本当にバカよね。私はアンタが良いから言つてるのに、どっちにしろ私の立つ瀬がないじゃない。……それとも、単に興味がないだけ？」

「何の興味だ？」

「だから、その……キスとか、……さ、……」

さすがにハッキリ口に出すのは憚つたのだろう。

ポツと目元を赤く染めながら、俯いてしまう様子を横目に眺めながら、ルルーシュは「別に？」とそっけなく呟く。

「そういうワケでもないけどな」

「だつたら、誰ならOKなのよ？」

「もちろん、嫁さんだ。将来、俺の」

「なら、結婚してよ」

「無茶を言つなよ」

「アンタなんか大ッ嫌い」

「そりゃ、どうも。二ヶ月前にも聞いたけどな。おまえ以外にも、五十人ほどから」

「っな ちよつとつ、なんで一気に、倍ほど人数が増えてるのよ？」

「しゃあしゃあと言うほうもアレだが、驚くカレンの論点も少しばかりズレている。」

ルルーシュは、しみじみ溜息まじりに呟いた。

「そりゃアな、十二月といえば、俺の誕生日以外にも、クリスマスとか、終業式とか、何かとイベントが目白押しだったろう？ そのドサクサじゃないのか？」

「ドサクサって、アンタねエ…、女の純情を」

「純情？ ハッ、アレのどこがだ？ こっちは受験前二ヶ月でピリピリして、相手をする余裕なんか皆無だったんだぞ？ おかげさまで、さんざん集中力を乱されて、こっちはいい迷惑だ」

恨みまじりにそう言つと、グツと二の句を失ったカレンが、気まぐすそうに視線を落とした。

ルルーシュは、頬杖をついた姿勢のまま、肩口をドスンと軽くカレンの二の腕あたりにぶつけた。

「妙な誤解をするなよ。俺が言ってるのは、勝手に俺に『友人以下』の烙印を押してくれた連中に対してだ。おまえだけが俺にフラれても、俺を見離さずに付き合っているんだ。さつきも言ったがな、どうして気持ちにに応じてやれないからって、口も利かなくなってしまうんだ？ 結局、友人としての俺には、何の必要も感じてないってことだろう？ どっちのほうが、タチが悪いんだ？」

ルルーシュが皇学園への編入を希望していることは、夏休み明けに、仲のよい連中には話して聞かせていた。

それが回りまわって、電光石火の勢いでルルーシュに想いを傾けている女子たちにも伝わって、直接祝うのは最後のチャンスになるかもしれない誕生日を狙って、下は初等部の三年生から、上は大学の三回生に至るまで、全部で占めて三十人以上が、決死の覚悟で告白に踏み切ったのだ。

いくらルルーシュがフェミニスト・タイプであるとは言え、受験前二ヶ月で相当イラついている時期だったから、あれには本当に困ってしまった。

挙げ句の果てに、友人だと認識していたはずの相手まで、立て続けに五人以上も一気に失くしてしまったわけだから、ルルーシュの気持ち的には、まさに『踏んだり、蹴ったり』だ。

その愚痴を、二ヶ月前にもカレンに話して聞かせている最中に、気がついた時にはカレンにも告白してしまったわけだったが。

カレンはしみじみ溜息を吐き出すと、あきれた様子で「バカねエ」と繰り返した。

「アンタが、その気もないのに誰彼かまわず優しくするのが悪いんでしょ？ アンタの気持ちが入るなら別だけどね、そうでもなきゃ、アンタみたいな男、惚れたら最後、こっちは四六時中嫉妬に狂ってなきゃいけないじゃないの。いったいこの物好きが、そんな苦しい思いを味わってまで、自分をフツた相手に優しくしたいと思うのよ？ デリカシーに欠けるのも、いい加減にしなさいよね」

二ヶ月前にも、こんな感じで淡々と、ルルーシュの理解を超えた女心に関して指南を受けている最中に、突然「好きよ」と告白されてしまったのだ。

最初から、あきらめ切っている表情で。

言われるまで、すこしも気づいてなかったルルーシュは、『その気が無いのを知ってるなら、どうしてわざわざ告白する必要があるんだ？』と心底頭を悩ませたものだったが、「言わなきゃ、アンタは気づきもしないでしょ？」と逆に戒められてしまったものだった。本当に、女というのは、厄介な生物だなと思いを噛み締めながら、ルルーシュは拗ねているような表情で無然と横目にカレンを睨め付けた。

「だったら、おまえはどうして、俺に付き合っているんだ？ おまえの言う、物好きだからか？」

薄く笑ったカレンは、「おあいにくさま」と軽く鼻の先であしらった。

「アンタがあんまり調子に乗って、私を友人扱いしてくれちゃうから、すっかり情が移ってしまったんじゃないの。いまさら私までアンタを見離してしまったら、泣くでしょ、アンタ？ 寝覚めが悪いじゃない そんなの」

本当は、ほかの女子たちと同じように、最初から玉碎覚悟で告白

するつもりでいたのだ。

ところが、何の因果か、先にルルーシュの口から恨み言を聞かされてしまったものだから、ほかの女子たちと同じように、避けることも出来なくなってしまうただけだった。

その気も無いクセに、優しくされてしまえば心が苦しい。

失恋で、ぽっかり穴が開いてしまった傷口を、本来ならば意識するのもツライから、ほかの女子たちは、自分が傷つきたくない一心で、あっさりルルーシュの『友人』という立場を捨て去った。

そして、その立場を捨て去る勇気の出なかったカレンは、今でも『友人』としてルルーシュに優しくされる特権を行使し続けながら、一向にふさがる暇の無い心の傷口に、むやみやたらに塩を塗りこまれる辛さにずっと耐えている。

一緒に居ると心地好いから、もっともつとルルーシュの優しさを独占したいと思ってしまうから、『どうして私じゃ駄目なのよ?』と恨みに思ってしまうから、一緒に居るだけで心地好いはずなのに、切なさばかりが高じてしまう。

そんなふうになんかの想いを一心に引き寄せながら、肝心の本人は、いまだかつて『恋』をしたことが無いものだから、相手がどんな気持ちを味わっているのか想像することも適わない。本当に、勝手な男だ。

だからといって、ルルーシュには、何の責任も無いけれど。

頬杖をついたまま、あらぬ方向をじっと眺めて、しばらく考え込んでいたルルーシュは、「そうだな」とポツリと呟いた。

「これを機に、おまえにまで避けられようものなら、ちよつと本気で泣くかもな。正直言つて、女性不信に陥りそうな気分だぞ? まったく、俺がいったい何をしたんだ?」

真剣にそんな愚痴を呟いて見せるものだから、本当に自覚がないというのはタチが悪いわねとカレンは思う。

綺麗な横顔だ。けれども、中身はほんの子どもだ。こと、恋に関しては。

「モテる男はツライわねエ？」

「うるさいな。……って、こらっ」

カレンの思惑に気づいて、とっさにルルーシュは身を引いて逃げていたのだが、完全にリラックスしている状態で、膝の上に体重を預けている格好だったので、大して移動することが出来なかった。

あっさり目的を達したカレンは、両手でルルーシュの顔を挟み込むと、一瞬だけ唇の先を押し付けた。

さすがに赤い顔をして元の位置まで身を引くと、同じく赤い顔をして、恨めしげに睨め付けてくるルルーシュに視線を合わせた。

「……ひよつとして、ファースト・キスだったりして？」

ルルーシュは思い切り憚然と答えた。

「ノーコメントだ」

「なんだ、やっぱり。ファースト・キスだったか」

「おまつ……、ちがうつ」

「言っときますけどね、ルルーシュ。こういう場合、家族間のキスはノーカウントなんだからね？」

「……ッ」

案の定、凶星だったらしい。

悔しそうに唇を噛み、ムツとした様子で顔を顰めてしまう。

『本当にこーゆーところは、いつまで経っても子どもなんだから』と、ルルーシュにはちよつと聞かせられたものじゃない感想を、カレンはしみじみ切ない気分で噛み締める。

「ちなみに、私は今のが二回目ですからね。残念ながら、アンタの心配は、最初からのが外れてるのよ」

一瞬、意外そうな顔をしたルルーシュは、舌打ちでもしそうな顔つきで視線を外した。

「ああ、そうかい。わるかったな」

「だからって、妙な誤解をしないでくれる？ 幼稚舎の頃に、年長組のガキ大将に、面白半分で無理やり奪われちゃっただけなんだからさ」

「ッ、……そうだったのか？」

いや、だからって、そんなふうに驚かれても、こっちのほうがつてしまっただけど。

カレンは溜息まじりに頷いた。

「昔の話よ。子どもの悪戯。その代わり、せめて初恋の相手とは、絶対キスしたいと思ってたんだ。ゴメンね、嫌がつてるのを無理強いで」

「うっ…、いや、別に、……無理強いとか、……」

本当に情に脆いところは相変わらずで、途端にオロリと勢いを失くしてしまう。

残念ながら、カレンはそこまで図々しいタイプではなかったが、たとえばそれが真つ赤な嘘でも、相手が『友人』であるだけで、案外ルルーシユは、簡単に騙されてしまうのではないだろうか。

本気で『恋』をされるのが迷惑なら、こんなふうに付け入る隙を見せなきゃいいのに。

「昔の話よ」

つまらなさそうにそう繰り返して、カレンは視線を外した。

「別に、アンタに慰めてもらおうなんて考えてないから、気にしないで」

なかなか沈まない太陽。それでも次第に勢いが衰えていく地上に、色濃く伸びる影。仕事を終えて、校門に向かって去っていく非常勤講師の後ろ姿。視線を感じたのか、一瞬二人の居る方向に振り向いた。カレンは、動じた気配もなく、ペコリと頭を振って会釈した。まったく興味が無いのが、遠目にもハッキリわかってしまう。くたびれた中年の美術教師は会釈のフリだけして帰っていく。意外と、そんなものよね。『大人のすることが、全部正しい』なんて幻想を抱く時期など、もうとつくに過ぎてしまつてゐる。それが『大人になる』ための最初のステップなら、ずいぶんと物悲しいものよねとカレンは皮肉まじりにそう思う。

「ただ私は、アンタの『特別』になりたかつた。単なる友人でも構

わないから、アンタの『特別』になりたかっただけなのよ、ルルーシュ。　単に、それだけ」

ルルーシュの存在を知ったのは、幼稚園の入園式の朝だった。

当時から、女王然とした風格で異彩を放っていた、ルルーシュの母親　マリアンヌ。

その傍らに連れられていた子どもが、同じ歳の子どもの目にも、本当に息を呑むほど可愛くて。カレン以外にも複数の園児たちが、母親に叱られながら茫然と見蕩れていたものだった。

それ以来、付かず離れずの距離から、存在を意識し続けてきて十二年。

一体いつから、この男が自分の中で『特別』な存在になってしまったのか。はつきり時期を特定できるものならば、その時期の記憶を、一切消してしまいたいとカレンは思う。

どっちみち、振り向いてもくれないなら、真剣に付き合っていたって仕方がないじゃない。

いつになく、言われる一方に甘んじているルルーシュが、ちょっと不満そうに俯くのが視界の端に映った。

不満があるなら、言えればいいじゃない。いつもみたいに。大嫌いよ、アンタのことなんか。こっちはアンタのすること成すこと、全部気になって仕方がないんだから。アンタのことなんか歯牙にもかけなかった時代に、記憶を戻してしまいたい。そしたら、こんなに苦しい気分なんて味わわずに済んでいたはずなのに。

そんな情けないことを考えてしまう自分のことが大嫌いで、カレンは、またちよつと泣きたい気分で俯いた。

「ほらね？　私がこう言えば、アンタは『今でも充分、特別だ』と思うでしょ？　そのクセ、アンタという男はね、このままあっさり見送つてしまえば、たとえば十年後ぐらいのクラス会で、『紅月さん、ひさしぶり』とか平気で言っちゃう男なのよ。ちゃっかり自分は幸せそうに、左手の薬指には指輪なんか嵌めちゃってね。一段とイイ男っぷりも全開で、平然とノロケ話を披露してくれちゃうに

決まってるんだから。悪いけど私は、そこまでお人好しじゃないのだから、今のうちにアンタが私に寄せてくれてる友情を、ちょっとだけ利用しただけなんだから。生理的に受け付けないって言うならさ、怒ってくれたほうがマシだけど。そうでないのなら、さっさと忘れてしまって？」

歌うような言い回しで、明るくそう言い切って。

ルルーシュは、無表情に話に耳を傾けながら、まっすぐに両脚を揃えて投げ出しているカレンの爪先が、落ち着きなくブラブラと揺れる様子を、なんとなく瞳の上に映していた。

「六年前」

「え？」

自分でも、どうしてそんな話をしようとしたのかわからない。

けれども、友情に付け入りたいというならば、すこしくらい口実を与えてやるのも、別に悪くないような気はしていた。

ルルーシュの言わんとしている言葉をいぶかしみ、カレンはその横顔に食い入るような熱い視線を向けてくる。

その視線を意識しながらゆっくり何度かまばたと、ルルーシュは視線を落としたまま藪から棒の質問を投げかけた。

「おまえ、クラスの代表で、俺の親父の葬式に弔問に訪れた際にも、さっきみたいに号泣しただろう？ 覚えてるか」

一瞬、言葉に詰まったカレンは、不自然に慌てて視線を外すと「さアね、どうだったかしら？」と鼻の先であしらった。

ルルーシュは、気にした様子もなく話を続ける。

「あのとき俺は、正直言っとうんざりしていたんだ。次から次にやってくる弔問客たちが、母さんを相手に口先だけの社交辞令を口にする。そして、その隣でケナゲにも、母さんの手伝いをしていた俺に視線を移して、露骨に『可哀想にねエ』と同情の視線を注いでくる。相手は年端も行かない子どもだから、当然のことなのかもしれないが。俺から言わせれば『ふざけるな』だ。アイツらの本音は、そうやって自分の優位を実感して、悦に入っているだけの自己満足

なんだからな」

よっぽど喧嘩を買ってやろうと思ったが、先にマリアンヌから、「おとなしくしていなさいね」と言い含められていたので、何の抵抗もできずに、ただ無造作に意地の悪い視線に晒されているしか方法がなかった。

「神妙な顔をして、内心では腹の底から怒り狂っていたところに、何も知らないおまえがノコノコ顔を見せにやってきた。正直言ってほかの誰に会うよりも、同世代の人間に会うのがいちばん鬱陶しい気分だったからな。なら、いつそ九歳の子どもらしく、おまえを泣かせてやろうと手ぐすね引いて待ち構えていたはずなのに、周りの雰囲気吞まれたおまえが勝手に力一杯号泣してくれるから、おかげで俺はおまえの世話を焼くのに必死で、後の記憶が一切残っていないんだ」

「うっ…わ、悪かったわねっ！」

こんな話をしたのは、六年の歳月のうちでも、もちろん初めてのことだった。

ルルーシュの、『弱音』に抵触する内容だったのだから、当然だ。真っ赤になって言い返すところから察するに、カレンもあの日のことを忘れてないのだろう。

ルルーシュは軽く仰け反るように後ろ手をつき、暮れなずむ夕焼け空を真上に見上げると、らしくない長口舌に疲れたような溜息を、ハアと力なく長く吐き出した。

父親が死んだとき、九歳だった自分が、今ではもう十五歳だ。

父親が居ないところで過ごした六年の歳月が、いったい自分にどのような変化をもたらしているのか。ルルーシュにはほとんど自覚の無いことだったが、いずれにせよ、あんまり褒められた成長の仕方ではない様子だなと苦々しく思いを噛み締めながら、ルルーシュはそれでも笑った。

よく晴れた日の青空を見上げる時のように、朗らかに。

「だから今でも、親父の葬式を思い出すたびに、おまえのみつとも

ない泣き声まで思い出してしまうから、ちつとも悲しい気分にならないんだ。なかなか最悪の記憶だろう？」

「……………」

「卒業式まで丸々一ヶ月近くもあるのにな。今から俺にこんなことを言わせるおまえは、もつと最悪だ。　　だがな、この六年、いちいち落ち込む暇もないくらい、おまえと競い合って過ごせた日々が俺は本当に愉しかった。おまえの前では、嫌でも年相応の自分で過ごせていたからな。そのぶん腹の立つことも多かったが、俺の記憶に人並みに『子供時代』を植えつけてくれたのは母さんでも、ナナリーでもない。カレン・シュタットフェルト　　紅月カレン、おまえの功績だ。せいぜい誇りに思って自慢していいぞ？」

そんな彼女を相手にしてさえ、『友情』以上の愛情を抱きようがない自分は、ひよつとすると『恋』に対して頑固なまでに臆病になっているのかもしれない。

そんな自分の心の有り様を、心底皮肉に思ってしまうが。

こればかりは人の気持ちの綾だから、ルルーシュ自身にもどうしようもない。

完全に俯いてしまったカレンは、膝の上に、パタパタと音が鳴るほど盛大に、大粒の涙をこぼし始めた。

「っ…ア、アンタって本当につ…………馬鹿なんじゃないのっ…?!」

「泣くな、バカ」

「うるさいわねっ、バカッ！　　っ…い、いったい誰のっ…せいだと…っ…おもって…っ」

最後まで言い切ることさえ適わずに、涙声でヒクツ、ヒクツと忙しなく、子どものように泣きじゃくり始める。

大人ぶった顔をして説教を垂れたりするクセに、コイツだって六年前のあのときから、ちつとも成長しちやいない。

結局、どれだけ背伸びしてみたところで、まだまだお互いに子どもなんじゃないかとあきれたように感じながら、ルルーシュは一瞬腕の中に力一杯カレンを抱きしめてやりたいと思ったが、それこそ

自己満足以外の何物でもない。

それきり口を閉ざしたまま、カレンが泣き止むまで待っていた。

「ごめんな」

やがてカレンが落ち着きを取り戻したところでそう言うと、力なくハアと溜息を吐き出したカレンは、平手でルルーシユの背中をバシツと殴った。

「謝るな、バカ」

度重なる号泣に疲れ切り、完全に鼻が詰まって、かすれ切った情けない声で。

それでも、ルルーシユよりも、よっぽど潔い笑顔で笑って。

勢いよく腰を上げたカレンは、クルリと振り向き、ルルーシユを見つめながら後ろ向きに歩き始める。

「そろそろ帰るわ。こっちこそ、引き止めちゃってゴメン」

「いや、それはいいけど。送って行かなくても平気か？」

「平気よ。バス停までお兄ちゃんに迎えに来てもらう約束だから」

「そっか」

そう言って、ルルーシユも腰を上げると、カレンは何とも表現しがたい、切ない表情で微笑んだ。

それは、考えてみれば、今までにも数え切れないほど眺めていた表情だった。

そして、今ならルルーシユも、自分のせいだと気づいている。

いったい自分がどんな顔をしたのか知らないが、ルルーシユの顔をまっすぐ見つめていたカレンが「馬鹿ね」と呟いて、ふんわり包み込むような表情で笑った。

「好きよ、ルルーシユ。アンタが初恋の相手で、本当に良かった。おかげで、次に誰かに恋をする時も、臆病にならずに過ごせそう」

ルルーシユも似たような表情で笑って、フンツと高飛車に鼻を鳴らした。

「ああ、自信を持て。おまえは、俺が認めたイイ女だ」

「生意気言つな。いいこと？ 私はファースト・キスの相手な

んですからね。簡単に忘れたら、承知しないんだから」

「うるさい、バカ。気をつけて帰れよ？」

「ありがと。じゃアね、また明日」

「ああ、またな」

につこり満面に笑みを浮かべると、その笑顔が崩れないうちに、カレンは潔く背中を向けて駆け出した。

次第に小さくなっていくカレンの後ろ姿を見送りながら、ルルーシュは何だか自分がフラれたような気分で溜息を噛み殺す。

思い通りにいかないのは、自分の気持ちだろうが同じことだった。本当に大切な相手だったから、いくらでも優しくしてやりたい気持ちは存在しているのだが、カレンが自分に求めているのはそういう類いの優しさじゃない。

そして、自分は、カレンが求めている優しいさしか表現してやることが出来ないのだった。

「……ごめんな」

こんなタチの悪い男に惚れさせて。

同じ温度で想いを返してやることも出来ないくせに、それでもカレンが向けてくれている想いの温度を、心地好く受け止めている部分は存在している。

自分が認めた相手に『恋』をさせるほど必要に欲されて、満足げに愉悦を味わっている部分を、ルルーシュはたしかに自覚しているのだ。

本当に勝手な男だな　と、つくづく自分の身勝手ぶりにあきれ返ってしまうが。

そうは思えど、どれだけ反省を続けようが、自分はそういう男なのだから、こればかりは、ルルーシュ自身にもどうしようもない自分よりよっぽど身勝手に、好き放題に青春を満喫しているスザクと比べると、果たして、男としてどっちのほうが一番悪なんだろう？　と素朴な疑問を抱きつつ。ルルーシュは溜息まじりに肩をすくめると、職員室に向かってきびすを返した。

まっすぐに続くリノリウムの床。

見渡すかぎりルルーシュ以外に、歩む者の姿はない。

森閑と澄みわたる冬の大地に入り混じり、遠くのほうでオーボエやファゴットの音がかすかに鳴っている。

おそらく体育館にでも足を運べば、大会を目前に控えた運動部の練習風景を目にすることが出来るのだろうが、それ以外の生徒たちは基本的に学期末テスト前の寸暇を有効に満喫しているはずだった。カッーン、カッーンと気だるく靴音を響かせながら、ルルーシュはふと思いついたように携帯電話の着信履歴を確認してみたが、やっぱり電話の一本どころか、メールの一通も届いていなかった。

本当に勝手な母親だな　と恨みまじりに思いつつ、Ｔ字路に差し掛かったところで、にわかに職員室の付近が活気付いているのに気づいた。

生徒たちは短縮授業で、とつくの昔に家路についているというのに。教職者というのも結構大変な商売だなと他人事のように思いながら、ルルーシュは自動式のドアを開けるためにタッチパネルに指先を伸ばした。

ところが、一瞬早く中から操作され、シュンツと軽い空気圧を発生して、すばやくドアが戸袋に吸い込まれた。

「あ、こんにちは、千葉先生」

古典と現国を担当している千葉は、黒目がちな痩躯が印象的な女性教師で。日本人でありながら、何やらシスターの貫禄を思わせる謹厳実直な態度で、生徒の規律や道德規範に大変厳しい。

習慣とは恐ろしいもので、ほとんど条件反射でルルーシュはペコリと会釈をしていたが、とっさの判断でついでに数歩退いていなければ、おそらく正面衝突は免れなかっただろう。

切迫した表情でドアの向こう側に立っていた千葉は、駆け出す勢いで足を踏み出したところでルルーシュと対面して。一瞬で、顔からザツと血の気を失うと、返事もしないで、悲鳴のような声音で部屋の中に叫んだ。

「見つかりましたっ、藤堂校長っ！！」

「なにッ、本当かつ？！」

予想外の事態に、あっけに取られたルルーシュは、無意識のうちにも更に数歩後ずさる。

その面前に、今でも現役で空手と柔道と剣道で鍛えている藤堂の頑強な体躯が迫ってきたものだから、誰だっけとひるんで当然だろうと怪訝に思いつつ、眉間にギュツと濃い皺を刻み込む。

そんなルルーシュの肩口を両手でグツと力強く鷲掴みながら、藤堂は深みのある低音で言葉を発する。

「落ち着きたまえ、ルルーシュ君」

「はあ…」

落ち着いています。

すくなくとも、先生たちよりは。

緊張感のカケラもなく答えたルルーシュの表情を見つめて、一度真剣な面持ちで頷いた藤堂は、振り向きざまに「セシルくん」と部屋の中に向かって呼びかけた。

「はい」

すぐさま姿を現したのは、英語教師のセシルだ。

見た目は親しみやすい、いわゆる『お母さんタイプ』だったが、結構おつちよこちよいで、意外なところで奇天烈で。

ルルーシュのクラスの副担任を受け持っている関係上、授業以外にも接触の機会は多く、毎日のように一風変わったその奇抜な言動で、大いに笑わせてくれている相手でもあった。

そのセシルまでもが紙のように真っ白に顔色を失くして、全身にピリピリと苛立っているような緊張感を漂わせている。

どうやら自分は、よっぽどの事態に巻き込まれているらしい。

客観的に状況を判断しながら、次に誰が口を開くのかとルルーシユが身構えていると、重々しく一度頷いた藤堂が、「きみは車で通勤していたはずだね？」とセシルに訊ねた。

とつさに息を呑んだセシルが、露骨な動揺に大きなブルー・アイズを揺らめかす。

「　ですが、校長！ 私には…っ」

藤堂は、すばやく片腕を伸ばして、セシルの肩口をグツと掴むと、あっさり反論を遮った。

「本当は私が動きたいところだが、しばらく私は、こちらで対応に追われてしまうことだろう。担任の扇先生もまた然りだ。きみに任せても構わないね」

「　…しかし、…いえ、承知しました」

「うん。三番ゲートを使つて、高速に乗るといい。今の時間なら電車のほうが早いだろうが　いや、そんなわけだからね、ルルーシユ君」

「はい、なんででしょう？」

おそらく、この場で一番落ち着き払っていたのがルルーシユだ。すくなくとも、藤堂の目にはそう映った。

セシルの肩を掴んでいた手を離すと、両手でがっしりとルルーシユの華奢な肩口を掴んで励ました。

「セシル先生について行きなさい。事情はそこで話すから」

「はい。わかりました」

状況はまったく把握できていなかったが、緊急を要していることだけは雰囲気だけで察していたので、すかさずセシルのほうに向かって視線の先を移した。

その意識を、ふたたび自分のほうに引き寄せるようにして、ルルーシユの肩を掴んでいる両手の圧力がグツと高じた。

「だいじょうぶだ、安心なさい。きみには、先生たちがついてい
るからね」

腹の底から真剣に言う藤堂の表情を、ルルーシュは無感動に見つ
め返して。

無言で目礼を交わして一歩退くと、今度は藤堂も引き止めること
なく、セシルのほうに視線を転じた。

「行きましょう、ルルーシュ君」

暗黙の了解で、手早く出かける用意を済ませていたセシルは、自
然な動きでルルーシュの背中に片手を添えた。

そして、カツカツと足早に靴音を鳴らして歩み始めると、さつき
まで喧騒に包まれていたはずの職員室が、今更ながらにひっそり閑
と静まり返っているのに気づいた。

おそらく二十人は詰めているであろう教職員たちが、一斉に色め
き立つほどの事態に陥っているわけだなと、きわめて冷静に状況の
分析を続けていると、Ｔ字路を曲がり切る寸前で、耳慣れた担任の
声が叫んだ。

「……ッなにもこんな時期でなくたってねえッ!!」

「扇先生ッ！　なんてことをッ!!」

「しかしですねッ！　私の身にもなってくださいよッ！」

「口を慎みなさいッ！　聞こえたらどうするんですかッ!!」

相手をしているのは、複数の女性教師の声だった。

声から察するに、千葉と、体育教師のヴィレッタだろうか。

聞き耳を立て、その場にじっと立ち止まっていたルルーシュの腕
を、容赦のない力でセシルがグイッと引っ張った。

「気にしないで。……それより、先を急ぎましょう」

精一杯に、怒りを噛み殺している声音だった。

どうやら担任教師が、一番取り乱しているらしい。

だから副担任であるセシルにお鉢が回ってきたわけだ。

教職者というのも、結構大変な商売ですね。

よっぽど、口に出して言ってやろうかと思ったが、セシルを相手

に八つ当たりをしても仕方がない。

口に出せない不満の代わりに息苦しさを感じて、ルルーシュは忙しなくセシルの後を追うついでに、ガラス窓の向こう側に視線の先を彷徨わせた。

どうやら日暮れと同時に、コンクール前の強化練習も終わりを迎えたのであろう。

楽器のケースを抱えたオーケストラ部の面々が、三々五々だらだらと渡り廊下を歩んでいる姿を見つけた。

自分でも理由は釈然としなかったが、ルルーシュは思わず奥歯をギリツと噛み締めるほどに激しい怒りを感じた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2687m/>

コードギアス 満ち潮の夜【第壱夜】ココデハナイドコカへ

2010年10月12日18時44分発行